

平成 23 年度 修士論文

ネガティブな自己開示における
被開示者の感情・行動及び開示者との関係

弘前大学大学院 教育学研究科

学校教育専攻 学校教育専修 臨床心理学分野

10GP106 泉 谷 京

目次

第一章 問題と目的	3
第1節. はじめに	
第2節. 自己開示研究の発展	
第3節. 自己開示と相談	
第4節. 本研究の目的	
第二章 ネガティブな自己開示後の被開示者と開示者との関係を測る尺度の作成	10
第1節 目的	
第2節 方法	
第3節 結果と考察	
第三章 ネガティブな自己開示における被開示者の感情・行動及び開示者との関係に関する研究（質問紙調査）	15
第1節 目的	
第2節 方法	
第3節 結果	
第4節 考察	
第5節 まとめ	
第四章 ネガティブな自己開示における被開示者の感情・行動及び開示者との関係に関する研究（面接調査）	41
第1節 目的	
第2節 方法	
第3節 まとめ	
第五章 総合考察	49
第1節 被開示者の感情、行動及び開示者との関係	
第2節 研究方法に関する今後の展望	
文献	53
資料	
面接承諾書	
質問紙	
各対象者の面接の逐語録	

この論文は、研究協力者である学生の事例をもとに行った研究であり、面接によって話された内容については守秘義務が生じますので、広く公開される「弘前大学学術情報リポジトリ」への搭載にあたって、研究協力者により語られた内容、第四章の結果および逐語録については削除してあります。削除された部分の閲覧を希望される場合は、下記までご連絡ください。

連絡先

〒036-8560

弘前市文京町 1

弘前大学大学院教育学研究科学学校教育講座臨床心理学分野

第一章 問題と目的

第 1 節 はじめに

人々は様々な形で他者とのコミュニケーションを行いながら、日常生活を過ごしている。この他者とのコミュニケーションの中で、自分の好きなものについて話したり、ある事柄に対する自分の意見を言ったり、時には自分の特性、状態、悩みを打ち明けたりなど、自分自身について正直に他者に表明することもある。Jourard（1971）は「自己開示（self-disclosure）」を、自分自身をあらわにする行為、そして他者が知覚しうるように自分自身を示す行為であると定義した。

自己開示研究は Jourard & Lasakow（1958）に始まり、今日に至るまで自分自身について他者に語る行為、すなわち自分のどのような側面についてどのような属性の他者に、どの程度開示するかということに焦点を当ててきており、その研究は多岐にわたっている。しかしながら、宮崎（2005）が指摘するように、自己開示は社会的場面で起こる、開示者、被開示者の相互作用であるにもかかわらず、自己開示の受け手である被開示者に焦点をあてた研究は少ない。

そこで、本稿においてはまず、初期の自己開示研究から今日に至るまでの自己開示研究の変遷を被開示者に着目し概観する。さらに被開示者について研究することの意義について、心理臨床場面や他の援助場面と比較しながら述べる。その上で、被開示者が自己開示時にどのような感情を抱きどのように行動するのか、対人関係を背景にした行動である以上、被開示者と開示者との間の関係についても広汎に検討していく。そして被開示者の実態をさらに詳細かつ丁寧に捉えるために面接調査を行うこととした。

第 2 節 自己開示研究の発展

Jourard & Lasakow（1958）は、態度・意見、趣味・関心、仕事（勉強）金銭、性格、身体という 6 分野 60 項目に関して、母親、父親、親しい女性の友人、親しい男性の友人、配偶者の 5 者に対し、それぞれ日頃どの程度開示しているかを問う Jourard Self-disclosure Questionnaire (JSDQ - 60) を作成した。その後、Jourard（1961）は使

用の便宜を促進する目的から、JSDQ - 25 という短縮版を作成している。JSDQ は、対象者（開示者）に身近な人物（被開示者）を想起させ、日ごろの自己開示の程度を自己報告するよう求める質問紙である。ここでの自己開示研究は、開示者がどの程度被開示者に対して開示しているかに関してのみ検討されており、被開示者の具体的行動までは明らかにされていない。

1970 年代半ばから、社会心理学の領域で自己開示の状況要因に着目した研究が出現した。Pennebaker（1986）は、トラウマ的出来事を告白することと心身の疾病との間に関連があることを見出している。彼は 1 日 1 回、4 日間に渡ってトラウマ的出来事を書かせるというライティング法を実施し、否定的情動の変化について記録した。その結果、実施した直後は否定的情動が高まったにもかかわらず、6 か月後の予後においては逆に否定的情動が低減することが示唆された。ここでは、トラウマ的出来事について対象者に記述するよう求めているが、それは日記と同様に記述した本人がそれを読むという、いわゆる被開示者が存在しないという形式で行われている。そこで、牧野・古川・木原・糸賀（2002）は被開示者が存在する場合と存在しない場合を設定し、トーキング法・ライティング法の双方で自己開示の効果を検証している。その結果、トーキング法を実施した群は被開示者が存在する場合の方が不安が減少し、ライティング法では被開示者の存在の有無にかかわらず不安が減少することが示唆された。

このように、自己開示研究は、被開示者の存在などをも取り扱った研究においても、共通して開示者に主たる関心を向けてきていた。自己開示の過程を考えると、それは開示者と被開示者による相互作用であるにもかかわらず、被開示者あるいは相互作用そのものに関心を向けた研究は開示者に関心を向けた研究と比較するとあまり多くない。こうした中で被開示者に主たる関心を向けた研究としては、オープナー特性や抑うつ傾向など被開示者の特性に関する研究（小口，1989；高橋・佐藤，2008；森脇・坂本・丹野，2004）をあげることができる。オープナー特性に関する研究では、聞き手の言語特徴を検討することで、積極的に開示者を打ち解けさせるような聞き手は、受動的に話を聞く聞き手に比べて、親密度の高い開示を受けやすいことを報告している（小口，1989）。一方、高橋ら（2008）は、自己開示を引き出しやすい聞き手の非言語的特徴を検討し、発話量が少ないこと、適度に間をとって相手の話を聞いていること、相手を見つめすぎる行動や自分の体

に触れるような行動が少ないということをオープナー特性として見出している。さらに、森脇ら（2004）は、自己開示の内容に関わらず抑うつ傾向の高い被開示者ほど、自己開示に対して拒絶的に反応し、受容的に反応しない可能性があることを指摘している。このように、被開示者に関心を向けた研究では、自己開示を促進・抑制する要因として、自己開示の聞き手、すなわち被開示者の言語・非言語反応や抑うつ傾向といった特性の違いに着目し、自己開示場面を検討している研究といえよう。

一方、蓑崎・佐々木（2006）は、ネガティブな内容の自己開示を受けた場合、傾聴時に被開示者の心拍数の上昇が見られ、不安感が高まるなど、生理的・心理的に被開示者が影響を受けていることを指摘している。つらかったことや苦しかったこと、悲しかったことなどのネガティブな自己開示は、このような被開示者個人への影響にとどまらず、自己開示時の被開示者の反応及び一連の行動への影響、さらには被開示者と開示者の関係にも影響を与えるものと考えられる。川西（2008）は、ネガティブな自己開示を受けた被開示者の受容・拒絶反応が開示者に与える影響について検討しており、受容反応がなされた場合の方が、拒絶反応がなされた場合よりも信頼が深まり、被開示者への好意が増すこと、顔見知り程度の知人から拒絶されるよりも親友から拒絶された時の方が、開示者の受ける衝撃が大きいことという二つの結果を示している。このように自己開示を開示者と被開示者との相互作用の過程として捉えることによって、自己開示研究は、開示者の特性や自己開示内容などの研究から、被開示者の感情や行動、さらには被開示者と開示者の関係へと広がりを持つものになるだろう。ところで、蓑崎ら（2006）、川西（2008）では、被開示者の感情や反応に焦点を当てた研究ではあったものの、両研究共にその論文中には「ネガティブ」という記述と「否定的」という記述が明確な区別が示されずに散見された。川西（2008）では「ネガティブ」という記述を被開示者の心理状態を示すものとして一貫して使用してはいたが、蓑崎ら（2006）では「ネガティブ」という記述を自己開示の内容から被開示者の心理状態にまで使用していた。「ネガティブ」「否定的」という記述の使い分けについて、概念の検討は必要とは思われるが、さしあたって本研究においては「ネガティブ」という記述を自己開示の内容のみを示すものとして使用することとした。

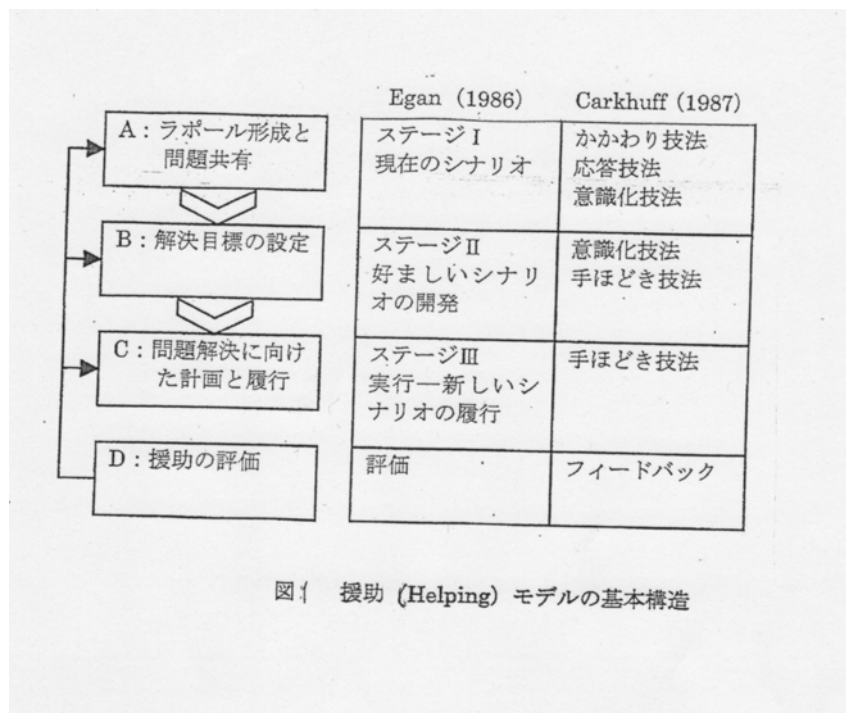
第3節 自己開示と相談

ところで、私たちは何か問題を抱えたり悩んだりした時に、カウンセラーなどの専門家に頼るよりもまず身近な人に相談するだろう。半澤・渡辺（2008）は問題が起こらないように普段から仲間同士で援助しあうことの重要性を説いている。仲間同士での援助という点において、同じ体験をした仲間同士でお互いの経験や気持ちを分かち合い、お互いに支援するピア・カウンセリングが学校教育を中心に障害者支援や生涯学習など様々な領域で注目されつつある。國分（2001）はピア・カウンセリングの効果について、学生同士・職場の者同士・家族同士の普段からの交流が問題の発生を予防し、さらには生活の充実感・幸福感を増すことを指摘している。ソーシャル・サポートの観点からも、道具的サポートは専門家から与えられるのが効果的であるが、情緒的サポートは家族や友人など親密な他者から供給されるのが望ましい（浦,1999）とも言われている。

非専門家による支援研究の一例としては、不登校生のサポーターに関する研究もあげることができる。豊嶋・近江・斎藤（2004）は、適応指導教室の通室生を支援する適応サポーターとして派遣されている学生の変化について類型化している。また、豊嶋・長谷川・加川（2002）においても、ピア・サポートの本質が、近い年齢帯の非専門家による斜めの関係による支援によるものとし、適応サポーターの専門的社会過程の個人構造を明らかにした。この研究は、最近ピア・サポート学会においても取り上げられることが多くなってきたが、これは不登校生を支援するサポーターと不登校生との間の斜めの関係による支援がピア・サポートの本質であり、その概念に則って考察することができるためであろう。自己開示について、ピア・カウンセリング、ピア・サポートといった観点から考えると、同年齢帯の他者に自己開示をし、それを聞いてもらうことが重要であり、支援ともなりうると考えられる。

また、相談は、自己開示の一場面であると考えることが出来る。自らの困りごとについて話すことはもちろんのこと、どうしてそのような状況に至ったのかを他者に話すのである。人が他者に話すということは、その人が他者から何かしらの援助を期待していると考えられる。そのように考えると、自己開示における被開示者は援助者であるとも考えられるだろう。原田（2003a）は、カウンセラーはもとより、医師や弁護士、日常的な援助者に至る様々な援助者にとって有益であるという Egan（1986）と Carkhuff（1987）の

援助モデルを概観し、図1のようにまとめた。ここでは特に、心理相談領域における援助と日常の相談場面に限定して記述する。



「心理相談領域においては、基本的にはラポールを形成し、被援助者の問題状況を探るところに重点をおいている。ただ、援助者のよって立つ理論的背景によってはこの援助モデルに近い構造を取り入れている場合もある。一方、日常の相談場面での援助を考えると、人はラポールを形成し、被援助者の問題状況を探り、問題解決に向けた助言をするという傾向があるが、具体的な解決目標の設定や援助についてはあまり重視されない」(原田, 2003a)

では、専門家でない、一般の人々はどのようにして他者からの相談を受けるのであろうか。原田（2003b）は、実験的に臨床心理学を学んだことのない大学生をカウンセラー役として、相談をされる側の発言データをカテゴリー化した。また、篠崎（1996）は、日常的な相談活動を「素人カウンセラー」の活動と名づけ、その行動の構造を検討している。どちらの結果においても、多少の差異はあるものの、相手の発言内容・立場や行為を肯定的に受け止め、自分なりに相手の気持ちを理解し、解釈したり、問題解決のための新たな視点やとるべき行動を提案したりといったことは専門家でない一般の人々でも行っていることが推測された。しかしながら、これらの先行研究においては相談される側、すなわち被開示者の感情については示されておらず、その後の二者の関係についても検討されてい

ない。被開示者がどのような感情を抱き、行動をするのか。そしてその後の関係がどのように変化するのか。その一端を理解することによって、専門家でない人々の持つ力についての知見を得られ、専門家と非専門家との間で協力しうる可能性が得られたり、ピア・カウンセリングを広めていくことが出来たりすることが考えられる。

相談事はその個人にとっての困りごとであり、内容もネガティブであることが多いように思われる。蓑崎ら（2006）、川西（2008）では、ポジティブな自己開示では開示者や自己開示を受け入れる方向に被開示者の感情や行動の偏りが予想されるために、被開示者の感情や反応のバリエーションが期待できるネガティブな自己開示を採用していた。同様の理由から、本研究においても、ネガティブな自己開示に限って扱うこととした。

第4節 本研究の目的

ここまで、社会心理学的視点や臨床心理学的視点からの自己開示研究について、被開示者に着目し、概観してきた。これまでの研究においては、どのような属性の被開示者が自己開示を受けたのか、被開示者がどのように開示者の話を聞くのかによって自己開示が抑制されたり促進されたりすること、そしてその自己開示によって被開示者が少なからず身体的・心理的影響を受けることが見出された。その一方で、こうした自己開示の相互作用過程が開示者と被開示者の関係に当然影響を与えているとも考えられ、その背因として被開示者がどのような感情を抱き、どのような行動をとっていたのかが重要であると考えられるが、それらについては検討がなされてこなかった。

また、自己開示を相談場面に転じて考えるとき、カウンセラーなどの専門家だけでなく、一般の非専門家の人々であっても他者から困りごとを打ち明けられることがあり、それを聞くことやアドバイスをすることなどにとどまらず、この他者からの自己開示を契機に自らの悩みを話そうとするかもしれない。このような点は、開示者にとっての被開示者が、あるいは被開示者にとっての開示者が互いに支え合うというピア・サポートともいえるものでもあり、その際に両者の間でのアオホザイン感覚が重要であるとも考えられる。「他社も私も同じである」といった実感である、このアオホザイン感覚を共有するためには、被開示者と開示者の間の関係が重要になるであろうし、被開示者と開示者の間の関係に影響を与える要素として、被開示者の感情や行動が関わっていると考えられる。

自己開示が日常的なコミュニケーションにしばしば認められる点、自己開示が開示者への心理的効果のみならず、被開示者への心理的効果にも及ぶものであり、さらに開示者と被開示者の関係にも影響がある点から、開示者のみならず、被開示者にも着目し、自己開示を開示者と被開示者の相互作用として捉えていくことが理想であると考え。しかし、そのように連続し、継続する相互作用をそのままに、直ちに取り上げることには理論的、方法的、かつ現実的に困難が伴う。そこで本研究では、まずこれまでの研究で少しずつ明らかになってきた被開示者の心理的状态を中心に扱っていききたい。その際に、被開示者の自己開示時の感情を中核として、開示者との間柄、自己開示の内容や時期、さらには被開示者の自己開示時の行動、自己開示後の開示者と被開示者の関係についてまで、出来る限り広汎に、かつ現実的に生じていることに即しながら被開示者に迫っていききたい。

そのために、本研究の方法としては、被開示者と開示者の関係を測る尺度を作成し（第二章）、質問紙調査によって被開示者の感情や行動及びその後の開示者との関係について広汎にかつ探索的に検討し（第三章）、そこで得られた一般的傾向を踏まえながら被開示者個々人の感情や行動及びその後の開示者との関係について面接調査によって詳細に検討を行う（第四章）こととする。

第二章

ネガティブな自己開示後の被開示者と開示者との関係を測る

尺度の作成

第1節 目的

これまで、自己開示に関する様々な尺度が作成されてきた。いかにその主だった尺度を上げ概観したい。まず、自己開示研究の出発点でもあった Jourard & Lasacow (1958) では、態度、趣味、仕事、金銭、パーソナリティ、身体・外観の 6 領域の内容に関して、父、母、同性の友人、異性の友人、配偶者などの対象者にどの程度話すかという自己開示量を測定する Jourard Self-Disclosure Questionnaire (JSDQ) を作成した。また Chelune (1976) は、自己開示の状況を測定する Self-Disclosure Situations Survey (SDSS) を作成している。日本では、1983 年に JSDQ の日本語版 (中村, 1983) が作成された。また、状況別開示傾向を測定するために、SDSS をもとにどのくらい他人に自分を開示したいかという意向を測定する開示状況質問紙が遠藤 (1989) によって作成された。さらに、丹羽・丸野 (2010) では自己開示の深さの測定に着目した 28 項目の尺度を作成した。さらに、榎本 (1997) では新たな自己開示質問紙 (ESDQ) を作成している。榎本・林・塩崎 (1984) では、性格や態度など 11 の側面による諸項目に加えて、趣味や意見、うわさ話に関する諸項目を加えた自己開示傾向や自己の透明性を測定する尺度を使用している。一方、このような自己開示や開示者についてというよりも、聞き手すなわち被開示者に焦点をあてた尺度も少ないながらも作成されてきた。Miller, Berg & Archer (1983) は、聞き手の自己開示の引き出しやすさについて opener という概念を提唱し、自己開示の引き出しやすさを測定する opener scale を作成している。また、森脇・坂本・丹野 (2002) は、自己開示の適切性や被開示者からどのような反応を受けるかといった被開示者の反応を測定する尺度を作成した。

このように、自己開示を測定する尺度は自己開示の内容や深さ、どれだけ開示したいのかという意向についてなど、自己開示そのものや開示者に焦点をあてたものにとどまらず、聞き手すなわち被開示者に焦点をあて、自己開示の引き出しやすさという被開示者の特性

や、被開示者からどのような反応を受けるかといった尺度が作成されてきた。しかしながら、森脇ら（2002）においては、対象者の被開示体験ではなく、開示者が聞き手から受けた反応について問うものであって、被開示者として開示された体験について問うものではない。被開示者を対象として自己開示をされた体験について尋ねることによって、はじめて被開示者がどのような意図でもってネガティブな自己開示を聞いていたのか、受け止めたのかなどについて被開示者の実態に迫ることが出来ると考える。そして、その自己開示の後の開示者との関係についてまで、被開示者の立場から検討を加えることにより、自己開示研究はさらに広がりを見せるものと考えた。しかしながら、開示者と被開示者の関係を捉えようとするとき、先に見た既存の尺度には適切なものが見当たらず、新たに独自の尺度を作成する必要があると考えた。そのため、まずはネガティブな自己開示における被開示者と開示者の関係の変化について、幅広くとらえる質問項目を作成することを目的として予備調査を行うこととした。

第2節 方法

2010年6月下旬に大学生11名を対象として予備調査を実施した。この予備調査では、自由記述形式の質問紙調査の後、書いてもらったことを元に面接調査を行った。質問紙では、ネガティブな自己開示を受けた後、開示者との関係の変化について具体的にポストイットに記入するよう求めた。ポストイットは50mm×70mmの大きさのもの20枚を教示文の下に付置した。その後、記入したポストイットをB4の白紙に分類しながら貼ってもらった。その直後に、分類に関して解説を加えてもらった。その際の面接にあたっては、被開示者と開示者がもともとどのような関係であったのか、その関係の変化を被開示者自身どのようにとらえていたのかといった点に留意した。調査時間は対象者一人あたり20～40分程度で、記述数は4～14個の範囲であった。

第3節 結果と考察

得られた総計80の記述について、対象者の分類をもとに研究者が改めてKJ法（川喜多・牧島，1970）により分類した結果を表1に示す。

表 1. 開示者との間の関係の変化の内容カテゴリ

I 開示者と対峙している時の在り方の変化 (56)	
① 開示者を気にかけるようになった (34)	開示者に対して心配し、役に立ちたい、大事だと思ふようになった
①-1 役に立ちたいと思った (13)	サポートしたい、力になれる存在でいたいと思うようになった
①-2 気遣うようになった (12)	心配したり、配慮したりするようになった
①-3 開示者へのまなざし (9)	対象者なりの開示者理解をするようになった
②開示者に懸念を抱くようになった (5)	一緒にいることが辛くなったり、相手に弱さを見せられなかったりした
③受容的になった (8)	優しさを心がけ、受容的に話を聞くようになった
④率直になった (9)	素のままでいられたり、正直に話せるようになったりした
II 距離感の変化 (21)	
⑤距離をとった (7)	開示者に近づかないように、あるいは近づきすぎないようにした
⑥距離が縮まった (10)	身体的・心理的に親密さを感じ、開示者と近づいた
⑦変化なし (4)	表面上は何も変わっていないもの、特別何かが変わらなかった
III その他 (3)	
	自分の気持ちを認めるきっかけになった
	勉強になった
	元気づけられて良かった

※表中、左半分には大・小カテゴリを示し、右半分にはそのカテゴリ内の回答例を記載した

なお、表 1 の左にはカテゴリ名を、右側にはそのカテゴリ内に含まれる回答例を示した。

被開示者がネガティブな自己開示をなされた後の関係について、【開示者と対峙している時

の在り方の変化】、【距離感の変化】、【その他】の3つの大カテゴリを得た。

【開示者と対峙している時の在り方の変化】は、【①開示者を気にかけるようになった】
【②開示者に懸念を抱くようになった】【③受容的になった】【④率直になった】という4
つの小カテゴリから構成される。【開示者を気にかけるようになった】は開示者を自分なり
に理解して接するようになった、サポートしたいと思うようになった、配慮するようにな
ったと被開示者が感じていたと思われるものである。【②開示者に懸念を抱くようになった】
とは、被開示者が開示者と一緒にいることに不安や迷いが見られるようになったと思
われるものである。【③受容的になった】とは、被開示者が開示者と接する時に、意識的に
受容的な態度をとろうと心掛けていているように思われるものである。【④率直になった】とは、
被開示者が開示者との接する時に素のままでいられるようになり、気軽に話せるようにな
ったというものである。

【Ⅱ距離感の変化】は、【⑤距離をとった】【⑥距離が縮まった】【⑦変化なし】の3つ
の小カテゴリから構成される。【⑤距離をとった】とは、被開示者が開示者と接する時にあ
まり近づかないよう心掛けて接している様子を示すものである。【⑥距離が縮まった】とは、
被開示者が開示者により身体的・心理的な繋がりを実感し、親密になったことを示すもの
である。【⑦変化なし】とは、表面上では変化していない、あるいは特に変化を感じるこ
とがなかったというものである。

【その他】は上記のカテゴリのいずれにも該当しない回答であり、その中には、自分の
気持ちを認めるきっかけとなったもの、勉強になった、元気づけられて良かったなど、関
係に直接関連がないように思われる記述が分類された。

この結果を踏まえ、【Ⅰ開示者と対峙している時のあり方の変化】、【Ⅱ距離感の変化】
のそれぞれのカテゴリを代表する回答例をもとに質問紙調査の質問項目を作成した。【①開
示者を気にかけるようになった】に該当する質問項目として、「開示者の話をもっときいて
あげたいと思うようになった」、「メールや電話など接触する回数が増えた」、「前よりも開
示者のために何かしてあげたいと思うようになった」、「開示者と一緒にいるとき聞き役に
なることが多くなった」の4項目、【②開示者に懸念を抱くようになった】に該当する質
問項目として、「開示者を苦手だと感じるようになった」、「開示者と一緒にいると無力感が
募るようになった」、「開示者と一緒にいることに不安を覚えた」の3項目、【③受容的に

なった】に該当する質問項目として、「開示者をいっそう大切に感じるようになった」、「開示者への信頼が増した」の 2 項目、【④率直になった】に該当する質問項目として、「開示者の前では自分らしく振る舞えなくなった（逆転項目）」、「開示者に接するとき、これまでよりも自分に正直でいられるようになった」の 2 項目、【⑤距離をとった】に該当する質問項目として「開示者とは顔を合わせづらくなった」、「開示者とはかかわりすぎないようにした」、「開示者と一緒にいると落ち着かない感じがするようになった」の 3 項目、【⑥距離が縮まった】に該当する質問項目として、「これから困った事が起きたら開示者に話そうと思った」、「開示者に気を使わなくなった」、「開示者への親しみが増した」、「開示者と気軽に話せるようになった」の 4 項目、【⑦変化なし】に該当する質問項目として、「開示者とはあえてこれまでどおりに接するようにと考えるようになった」の 1 項目を設定し、関係尺度 19 項目を作成した。

また、Altman & Taylor (1973) や榎本 (1997) は、開示者・被開示者相互の自己開示が、関係を進展させ、相互の信頼関係を築くことになると指摘している。関係を進展させるには、一方的な自己開示をしても傷つく危険性が少ないと感じられることが必要であるとも、榎本 (1997) は述べている。この危険性が少ないと感じられる状態に重要となるのは、相互に受容されていると実感でき、拒絶されていないと実感できることであり、かつそれらが持続していることであると本研究では考える。そこで、本章で選定した関係尺度 19 項目に加え、近江・田名場(2004)の被受容感・被拒絶感に関する尺度 10 項目を開示者と非開示者の関係を捉える尺度として追加することとした。

第三章

ネガティブな自己開示における被開示者の感情・行動及び開示者との関係に関する研究（質問紙調査）

第 1 節 目的

先に第 1 章でも述べたが、自己開示が日常的なコミュニケーションにしばしば認められるものでもある天、自己開示が開示者への心理的効果のみならず、被開示者への心理的効果にも及ぶものであり、さらに開示者と被開示者の関係にも影響がある点から、自己開示の研究は、開示者と被開示者の相互作用として扱うことが重要であり、理想であると考え、しかし、その連続し、継続する相互作用をそのままに直ちに引き上げることは理論的、方法的、かつ現実的に困難が伴う。

そこで本性では、まずはこれまでの研究で少しずつ明らかになってきた被開示者の心理的状态を中心に扱っていききたい。その際に、被開示者の自己開示時の感情を中核として、開示者との間柄、自己開示の内容や時期、さらには非開示者の自己開示時の行動、自己開示後の開示者と被開示者の関係についてまで、できる限り広汎に、かつ現実的に生じていることに即しながら被開示者に迫っていききたい。

そのために、本章の方法としては、既存の自己開示に関する尺度に加え、新たに前章で作成した開示者と被開示者の関係を測る尺度を導入し、さらに自由記述回答形式をできる限り取り入れるなどした質問紙調査を用いることとした。また、非開示者の自己開示を受けた経験の中から、蓑崎ら（2006）、川西（2008）同様の理由で、特にネガティブな内容の自己開示を受けた経験を早期するように求めることとした。その上で、自己開示時の非開示者の感情や行動、自己開示後の開示者と被開示者の関係について、その特徴や関連性を丹念にまとめあげ、探っていくことを目的とした。

第 2 節 方法

2010 年 6 月下旬から 7 月上旬にかけて、大学生 105 名（平均年齢 19.59 歳、 $SD=0.73$ 、

男性 45 名、女性 58 名、性別不明 2 名）を対象として質問紙調査を行った。身近な人からネガティブな自己開示を受けた経験の中で、最も印象に残っていることを一つ想起するよう教示した上で、質問紙への回答を求めた。所要時間は 20 分程度であり、心理学関係の講義時間内に実施し、即時回収した。なお、使用した質問紙については資料 2 に示した。

自己開示研究において、榎本（1987）は被開示者の属性によって開示される内容に偏りがあることとしている。翻って言えば、被開示者にとっても開示者の属性によって開示される内容が異なることになる。このことを踏まえ、質問紙では、開示者の属性、自己開示を受けた時期、自己開示の内容、自己開示時の感情、自己開示時の行動と自己開示後の関係を調べる項目で構成した。開示者の属性については、父親、母親、兄、弟、姉、妹、同性の友人、異性の友人、恋人、先輩、後輩、その他の選択肢から一つを回答するよう求めた。自己開示を受けた時期については、調査対象者が大学生であり、大学以前の就学年数は少なくとも 12 年、その中でも小学生は 6 年と長いため、記憶が曖昧になっていることを鑑みた上で、小学校時は低学年・中学年・高学年の三段階に分けた。発達段階において青年期に足を踏み入れており、比較的記憶が新しいことが考えられる中学校以降は、大学 4 年までの 1 年刻みで分けることとし、合計 13 個の選択肢から一つを回答するよう求めた。

自己開示の内容、及び自己開示時の被開示者の感情については、自由記述で回答を求めた。自由記述の回答にあたっては、特に差し支えない範囲での回答で構わない旨の教示を加えた。

開示時の行動については、森脇・坂本・丹野（2002）の聞き手の受容的反応尺度及び聞き手の拒絶的反応尺度をもとにした行動尺度 21 項目について、5 段階評定（1：あてはまらない～5：あてはまる）で回答を求めた。自己開示後の関係については、予備調査で得られた 19 項目及び近江ら（2004）の被受容感・被拒絶感尺度 10 項目の計 29 項目について、5 段階評定（1：あてはまらない～5：あてはまる）で回答を求めた。

第 3 節 結果

3-1. 自己開示の内容の分類

自己開示の内容の分類にあたってはネガティブな自己開示をされた経験がないとする回答と、記入漏れのある回答を除いた 95 名を分析対象とした。自己開示の内容を文意ごとに

分割し、1枚のカードに記述した結果、総計100の文意記述を得た。その後、KJ法により分類を行った。その結果、家庭に関すること、人間関係に関すること、恋愛に関すること、学業に関すること、精神・身体に関すること、その他の6つのカテゴリを生成した（表2）。

表2 自己開示の内容のカテゴリ

	カテゴリ名	該当数 (%)
1	家庭に関すること	27 (27.0)
2	人間関係に関すること	24 (24.0)
3	恋愛に関すること	22 (22.0)
4	学業に関すること	17 (17.0)
5	精神・身体に関すること	7 (7.0)
6	その他	3 (3.0)
		100(100.0)

被開示者が受けたネガティブな自己開示の内容としては、家庭に関することが最も多かった。具体的には家庭内の不和や家庭の経済状況の困窮が挙げられた。続いて、学校や部活・サークル内での関係の不和、いじめなど家庭以外の人間関係に関すること、恋愛でのトラブルや恋人との別れ話、恋人にフラれたことなど恋愛に関することが多く挙げられた。さらに成績が良くない、大学で留年することが決まったなど学業に関することが多く挙げられていた。疾患や身体的特性についての悩みなど精神・身体に関することは1割弱であった。

3-2. 自己開示の内容の分類と開示者の属性

次に、被開示者が開示を受けた相手、すなわち開示者の属性を、自己開示の内容の分類別に図2に示した。

被開示者が想起した開示者の属性は、同性の友人が最も多く（60名）、続いて恋人（11名）、異性の友人（10名）、母親（8名）、妹（3名）、兄（2名）、姉、祖母、先輩（各1名）

と続いた。なお、父親、弟、後輩から開示されたという回答はなかった。

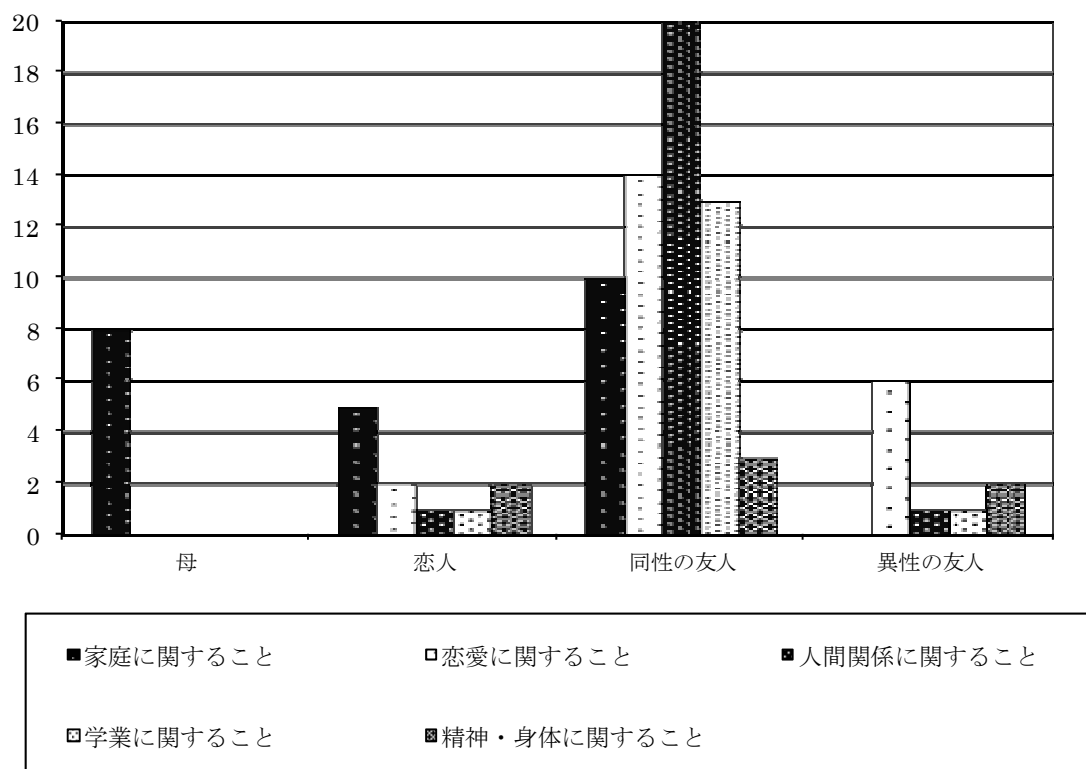


図 2 自己開示の内容と開示者の属性

図 2 には該当回答が 3 名以下の属性については省略した。同性の友人からの自己開示の内容としては、人間関係に関する事、恋愛に関する事、学業に関する事、家庭に関する事の 4 カテゴリで 9 割以上を占めた。開示者として母親、兄、姉、妹、祖母などの家族を想起した回答は少なかったものの、そのいずれにおいても自己開示の内容は家庭に関する事が多く挙げられた。異性の友人からの自己開示の内容は恋愛に関する事が最も多いことも特徴であった。恋人からの自己開示の内容として挙げられたのは、家庭に関する事が最も多く、ついで恋愛に関する事、精神・身体に関する事が続いた。

3-3. 自己開示を受けた時期と開示者の属性

被開示者が自己開示を受けた時期として最も多かったのは大学 1 年の時という回答で全体の 25%、ついで高校 3 年の時で 16%、大学 2 年の時で 13% だった。大学生になってという回答は全体の 44% であった。ついで高校生 29%、中学生 20% であった。小学生時代に開示されたことを想起した人は 5% であった。

自己開示を受けた時期と開示者の属性についてクロス集計を行った結果を図 3 に示した（なお該当数の少なかった小学校低学年・中学年・高学年については除いた）。

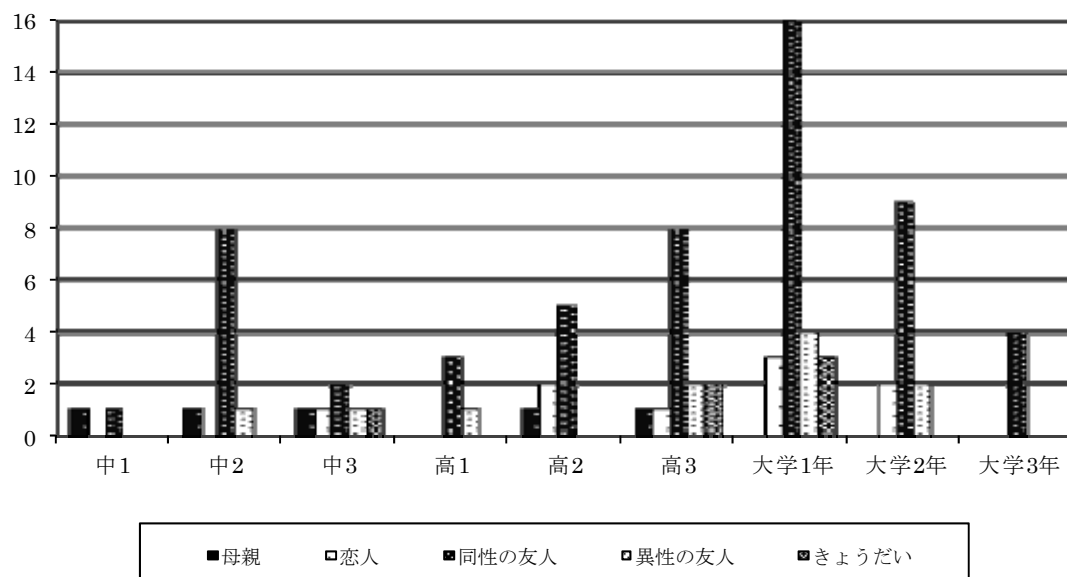


図 3 自己開示を受けた時期と開示者の属性

被開示者が母親から開示を受けた時期は小学生から高校生までにわたっているが、大学生になってからという回答はなかった。その一方で、兄、姉、妹などのきょうだいから開示を受けた時期は小学生・中学生ではほとんどみられなかったが、高校生・大学生になるにつれて多くなっていた。恋人や同性の友人、異性の友人からの開示時期に関しては、中学 2 年から漸増する傾向が見受けられた。

3-4. 自己開示を受けた時期と自己開示の内容

さらに、被開示者が自己開示を受けた時期と自己開示の内容について検討した。その結果は図 4 に示した（なお、該当数の少なかった小学校低学年・中学年・高学年については除いた）。

被開示者が家庭に関することを開示された時期として多かったのは大学 1 年と高校 3 年（各 4 名）であった。ついで、高校 2 年、中学 2 年、小学校高学年（各 3 名）、中学 3 年、大学 2 年（2 名）と続いた。恋愛に関することを開示された時期として多かったのは、大学 1 年、大学 2 年（各 5 名）であり、ついで高校 2 年、高校 3 年（各 3 名）、そして大学

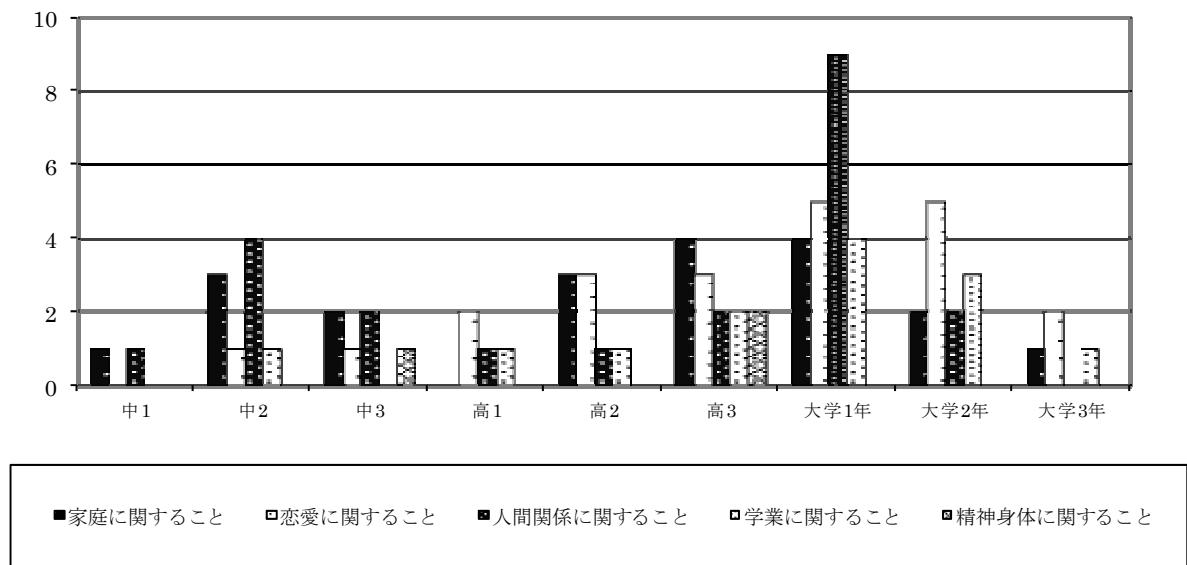


図 4 自己開示を受けた時期と自己開示の内容

3 年、高校 1 年（各 2 名）が同数で続いた。人間関係に関することを開示された時期としては、大学 1 年が最も多く（9 名）、ついで中学 2 年（4 名）、大学 2 年、中学 3 年（各 2 名）と続いた。学業のことを開示された時期として挙げられていたのは、大学 1 年が最も多く（4 名）、ついで大学 2 年（3 名）、高校 3 年（2 名）と続いた。精神・身体に関することについて開示されたという回答は少なかったが、高校 3 年において 2 名、中学 3 年において 1 名の回答があった。

3-5. 開示時の被開示者の感情の分類

ネガティブな自己開示を受けた経験がないとする回答、及び記入漏れのあった回答を除いた 95 名分の自由記述の回答を文意ごとに分割し、1 枚のカードに記述したところ、総計 123 の文意記述を得た。この 123 の文意記述について KJ 法により分類を行った。その結果、開示者への寄り添い、衝撃、悲しみ、達観、同情、自分の経験との重ね合わせ、怒り、信頼された嬉しさ、戸惑い、その他の 10 カテゴリを生成した（表 3）。表 3 では、これらカテゴリのほか、回答のカテゴリ該当数と割合、カテゴリの概要、及びカテゴリに該当する回答例（回答例については文意一項目ずつ区切って表示した）について示した。カテゴリに該当する回答で最も多かったのは、「助けたいと思った」、「一緒に悩んだ」など、開示者のために何かをしたいと思う気持ちが表れたカテゴリ 1「開示者への寄り添い」であった。続いて「意外すぎてびっくりした」、「マンガやドラマの中だけの話だと思っていた。

身近な人が経験しているということでショックを受けた」など、話の内容に驚き、ショックを受けているカテゴリ 2「衝撃」、「自分のことのようにつらく悲しくなった」、「同じく苦しい感じがした」など開示者と同じように悲しくつらくなるカテゴリ 3「悲しみ」が同等に多かった。続いて、「面倒くさいと思った」、「結局は自分で解決しなきゃだよ」などというように、開示者と距離を保っていると思われるカテゴリ 4「達観」が多かった。さらに、「可哀そうだなと思った」、「大変そうだな」、「つらいんだろうなぁと同情した」など開示者を可哀そうだと思うカテゴリ 5「同情」、「自分も似ている状況だったので安心した」、「自分がまったく経験したことのない問題であったから考えさせられた」というように自分の経験に沿って相手の話を聞いていたと思われるカテゴリ 6「自分の経験との重ね合わせ」、「とても嫌で、むかむかして、心の整理がつかなくなった」、「裏切った女の子に対して怒りを感じた」などというように、開示者に対して、あるいは開示者の悩みの種となっているものに対して怒りを抱くカテゴリ 7「怒り」、「『自分を頼ってくれているのか』と思い嬉しかった」、「信用されている気がしてうれしかった」など、相手からの信頼を感じ取り嬉しさを表したカテゴリ 8「信頼された嬉しさ」がそれぞれ続いた。「どう反応したらいいかわからなかった」、「どうしていいかわからなかった」など、どうしたらよいのかわからずにいるカテゴリ 9「戸惑い」を抱いている人もいた。この後の統計的分析を行うにあたっては、戸惑いの記述該当数が 3 と少なかったため、戸惑い・その他を除いた 8 カテゴリで分析を進めた。

また、今回の調査で複数の感情を併記した人は 2 割程度存在した。その中でも感情の組み合わせとして「開示者への寄り添い」と「衝撃」が最も多く（6 名）、「開示者への寄り添い」と「悲しみ」（5 名）、「衝撃」と「悲しみ」（3 名）と続いた。

表 3 自己開示時における被開示者の感情のカテゴリ

	カテゴリ名	該当数(%)	カテゴリの概要	自由記述回答例
1	開示者への寄り添い	26 (31.98)	開示者のために何かをしたいという気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・助けたいと思った ・一緒に悩んだ ・精神面で支えたいと思った
2	衝撃	17 (20.91)	話の内容への驚き	<ul style="list-style-type: none"> ・意外すぎてびっくりした ・マンガやドラマの中だけの話だと思っていた。身近な人が経験しているということでショックを受けた
3	悲しみ	17 (20.91)	打ち明けられたことで開示者と同じようにつらく悲しくなる	<ul style="list-style-type: none"> ・悲しくなった ・自分のことのようにつらく悲しくなった ・同じく苦しい感じがした
4	達観	15 (18.45)	あくまでもその人のことであると冷静に分析している	<ul style="list-style-type: none"> ・そのように感じる人もいるんだなと思った ・面倒くさいと思った ・聞いてあげるけど結局は自分で解決しなきゃだよ？
5	同情	12 (14.76)	開示者をかわいそうだと思う気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・可哀そうだと思った ・大変そうだな ・つらいんだろうなあと同情した
6	自分の経験との重ね合わせ	10 (12.3)	自分の経験したこと、していないことを踏まえての感情	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に自分も似ている状況だったので安心した ・自分がまったく経験したことのない問題であったから考えさせられた ・その話を打ち明けられて、自分自身のことについても思い返すこととなって複雑な気持ちになった
7	怒り	10 (12.3)	開示者に対して、あるいは開示者の悩みの元となっているものへの怒り	<ul style="list-style-type: none"> ・とても嫌で、むかむかして、心の整理がつかなくなった ・何を考えているんだろう ・裏切った女の子に対して怒りを感じた
8	信頼された嬉しさ	10 (12.3)	打ち明けてくれたことへの信頼、そこから生まれる喜び	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分を頼ってくれているのか」と思い嬉しかった ・信用されている気がしてうれしかった ・打ち明けてくれてうれしかった
9	戸惑い	3 (3.69)	どうしたらよいのかわからず困惑している	<ul style="list-style-type: none"> ・どう反応したらいいかわからなかった ・どうしていいかわからなかった ・どうしたらいいかわからなくなった
10	その他	3 (3.69)	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れました

3-6. 自己開示時の被開示者の行動の因子分析

自己開示時の行動の構造を検討するために、105名の回答のうち無回答だった2名を除

いた 103 名を対象として、自己開示時の行動尺度 21 項目（うち 3 項目に天井効果、11 項目にフロア効果が認められたが、それぞれ±.5 程度であり極端な天井効果、フロア効果ではないと判断し、項目を除くことはせずに全項目での分析を進めた）について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子抽出基準を固有値 1 以上とし、8 因子を採択した。各項目の因子負荷量および因子間相関を表 4 に示した。

第 1 因子は「意見を言わなかった」「頷くだけだった」「何も質問しなかった」などの質問項目で因子負荷量が高く、頷くなどの非言語反応で開示者を受け止めようとはしながらも言語反応の少ない行動だと考えられたため、「言語反応の少なさ」と解釈した。第 2 因子は「好意的に反応した」「真剣だった」「開示者が楽になるように心がけた」など、開示者が嫌な思いをしないようにする行動と考えられるので「気遣い」と解釈した。第 3 因子は「開示者の話に興味を感じられなかった」「時間の経過が気になった」といった相手の話に興味を持てずにいる行動と考えられるので「興味喪失」と解釈した。第 4 因子は、「自分のことのように感じられた」に正の、「他人事のように感じた」に負の高因子負荷が認められた。これらは相手との一体感を表していると考えられるので「一体感」と解釈した。第 5 因子は「つきはなした」「開示者のことを考えるのが面倒になった」といった開示者と距離をとり、開示者へのかかわりが消極かつ拒否的になっている行動と考えられるので「拒絶」と解釈した。第 6 因子は、「関係のない話を始めた」に正の、「最後まで時間をかけて聞いた」に負の比較的高い因子負荷量が認められたため、相手の話に集中していない行動と考えて「意識散漫」と解釈した。第 7 因子は「話の途中で遮った」という開示者の話を遮る行動だったので「遮断」と解釈した。第 8 因子は、「結論が出るまで聞いた」「解決の行動まで一緒にとった」に比較的高い正の因子負荷量が認められ、被開示者が開示者とともに解決を模索する行動と考え「解決探索」と解釈した。

因子間相関は.00～.46 であった。特に、第 2 因子「気遣い」と第 4 因子「一体感」の間で.31、第 3 因子「興味喪失」と第 5 因子「拒絶」との間で.37、第 3 因子「興味喪失」と第 6 因子「意識散漫」との間で.38 の正の弱い相関が、第 3 因子「興味喪失」と第 8 因子「解決探索」との間で-.33 のという負の弱い相関が見られた。また、第 5 因子「拒絶」と第 6 因子「意識散漫」との間で.46 の中程度の正の相関が見られた。因子間相関において、第 3 因子「興味喪失」が多くの因子との間で弱い相関が認められたのが特徴といえよう。

表 4 自己開示時の行動尺度の因子分析（因子負荷量と因子間相関）

質問項目	因子 1 （言語反 応の少な さ）	因子 2 （気遣い）	因子 3 （興味喪 失）	因子 4 （一体感）	因子 5 （拒絶）	因子 6 （意識散 漫）	因子 7 （遮断）	因子 8 （解決探 索）
意見を言わなかった	.91	.00	.07	.07	-.01	-.11	-.01	-.13
頷くだけだった	.74	.15	-.02	-.07	-.10	.03	.16	-.09
何も質問しなかった	.73	-.10	.01	.15	.03	.04	-.07	.05
自分の体験を話した	-.35	.12	.15	.33	-.03	-.02	.16	-.29
好意的に反応した	-.07	.74	.06	-.05	.13	.19	-.14	-.20
真剣だった	.15	.54	.03	.10	.08	-.31	-.05	.12
開示者が楽になるよう心がけた	.05	.52	-.14	-.14	-.12	.00	.00	.01
集中して話を聞けなかった	.12	-.48	-.15	.03	.19	.14	-.01	-.11
開示者の気の休まるまで一緒にいた	.00	.28	-.17	-.01	-.13	-.03	.13	.08
開示者の話に興味を感じられなかった	.03	-.05	.94	-.05	.12	-.12	.03	.09
時間の経過が気になった	.01	.02	.64	.08	-.17	-.02	.03	.12
自分のことのように感じられた	.10	-.10	.13	.92	-.15	.12	-.05	.11
他人事のように感じた	.02	.01	.31	-.58	-.14	.33	-.05	.10
つきはなした	-.12	-.08	-.12	-.07	.86	-.09	.06	.15
開示者のことを考えるのが面倒になった	.06	-.26	.07	-.07	.51	.01	-.05	-.08
話題をそらした	.21	.19	.00	-.01	.32	.27	.13	-.01
関係のない話を始めた	-.03	-.07	-.10	-.03	-.06	.61	.10	.02
最後まで時間をかけて聞いた	.04	.24	-.07	-.12	.03	-.45	.02	.23
話の途中で遮った	.04	-.06	.05	-.03	.07	.13	.92	.05
結論が出るまで聞いた	-.10	.02	.21	.01	.06	-.14	.05	.64
解決の行動まで一緒にとった	-.04	.13	-.06	.28	.14	.34	-.03	.49
因子間相関	因子 1（言語反応の少なさ）	—	-.23	-.01	-.20	.17	.07	-.02
	因子 2（気遣い）		—	-.13	.31	-.14	.05	-.06
	因子 3（興味喪失）			—	-.29	.37	.38	.10
	因子 4（一体感）				—	-.19	-.07	.00
	因子 5（拒絶）					—	.46	.13
	因子 6（意識散漫）						—	.12
	因子 7（遮断）							—

各因子の α 係数は、「言語反応の少なさ」で $\alpha = .755$ 、「気遣い」で $\alpha = .596$ 、「興味喪失」で $\alpha = .589$ 、「一体感」で $\alpha = .677$ 、「拒絶」で $\alpha = .450$ 、「解決探索」で $\alpha = .449$ と第一因子以外の内的整合性が低いという結果になった。

3-7. 自己開示時の被開示者の感情と行動の関連

自己開示時における被開示者の感情と行動の関連を検討するため、8 種類の感情カテゴ

りに関して、該当する被開示者に特徴的な行動を探った。具体的には、各感情カテゴリに該当する被開示者を抽出し、その被開示者における行動尺度 8 因子の因子得点（回帰法にて算出）の平均値の比較をするために一要因分散分析（被験者内計画）を行った。その結果、「開示者への寄り添い」($F(7,175)=3.081, p<.01$)、「達観」($F(7,98)=3.431, p<.01$)において有意差が認められ、「信頼された嬉しさ」($F(7,63)=1.90, p<.10$)において有意傾向が認められた。上記三種の感情における各行動因子得点平均値について、図 5～7 に示した（図中の（）内の値は標準偏差）。

さらに、有意差ないし有意傾向の認められた上記 3 種類の感情カテゴリの各行動因子得点平均値について、Bonferroni 法による多重比較を行った。その結果、開示時に被開示者が「開示者への寄り添い」感情を感じている場合、第 2 因子「気遣い」行動が、第 3 因子「興味喪失」行動、第 6 因子「意識散漫」行動や第 7 因子「遮断」行動よりも強く生じていた（いずれも $p<.05$ ）。被開示者が「達観」感情を抱いた場合には各行動因子得点間に有意差は見られなかった。開示時に被開示者が「信頼された嬉しさ」を感じている場合、第 1 因子「言語反応の少なさ」行動は、第 7 因子「遮断」第 8 因子「解決探索」行動以外の全ての行動より生じにくいことが示された（「気遣い」「一体感」「拒絶」で $p<.01$ 、「興味喪失」「意識散漫」で $p<.05$ ）。第 2 因子「気遣い」行動は、第 3 因子「興味喪失」行動よりも強く生じる傾向があった（ $p<.05$ ）。第 3 因子「興味喪失」行動は、第 4 因子「一体感」行動（ $p<.05$ ）や第 5 因子「拒絶」行動（ $p<.01$ ）、及び第 6 因子「意識散漫」行動（ $p<.05$ ）に比較して生じにくいことが示された。

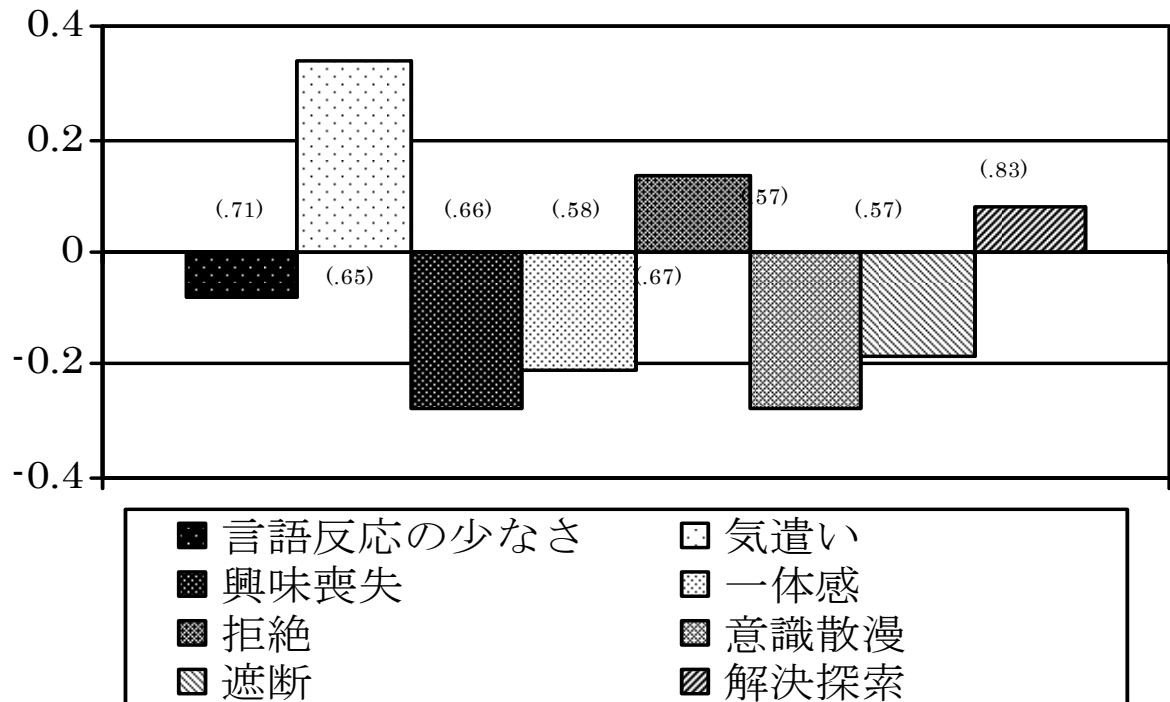


図 5 開示者への寄り添い感情がある場合の各行動因子得点平均

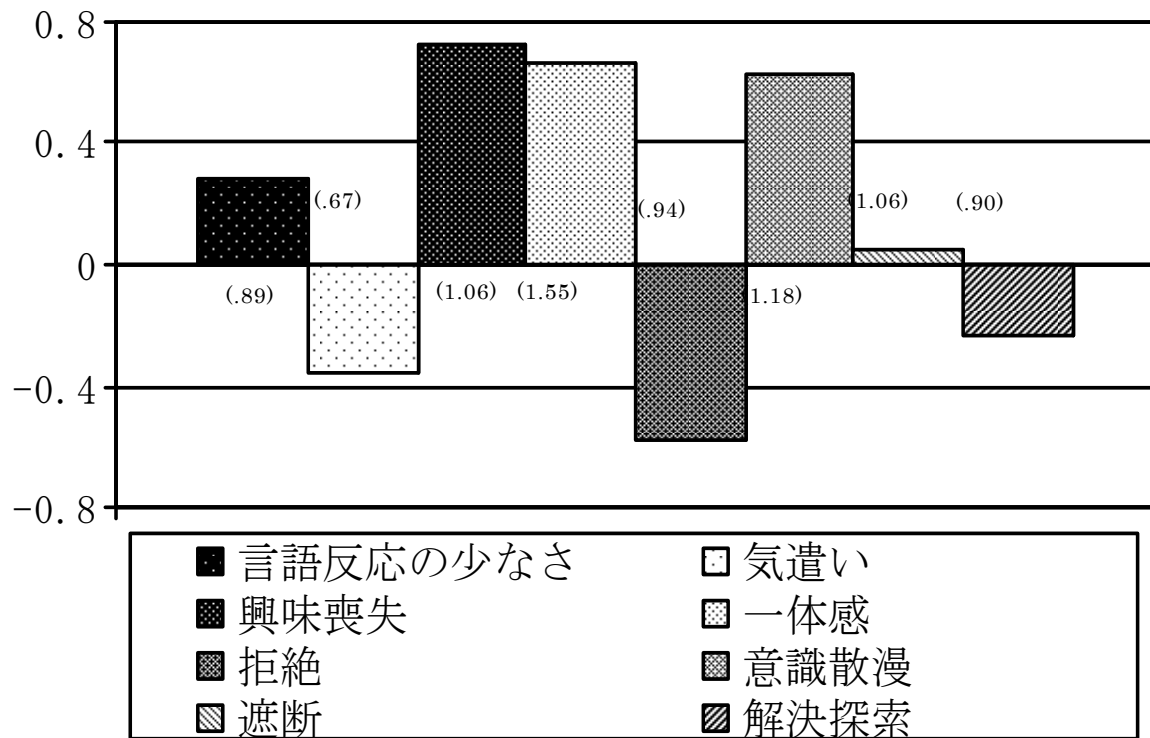


図 6 達観感情がある場合の各行動因子得点平均

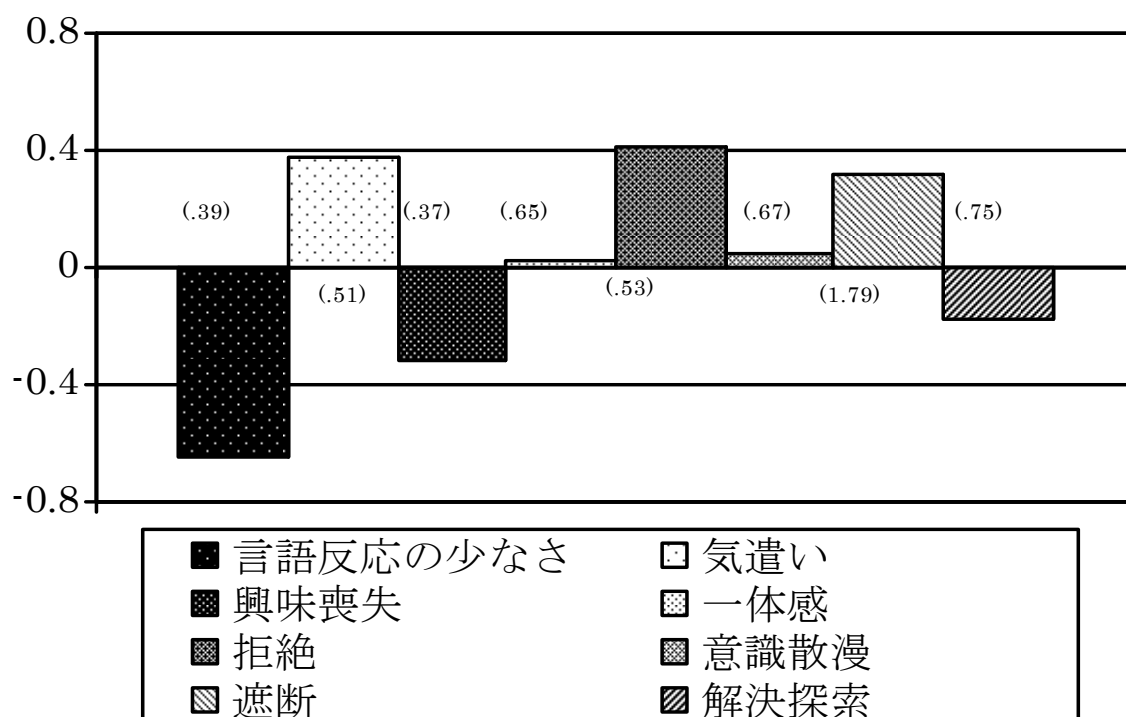


図 7 信頼された嬉しさ感情がある場合の各行動因子得点平均

3-8. 自己開示後の被開示者と開示者との関係及び被受容感被拒絶感の因子分析

予備調査から得られた全 19 項目の自己開示後の関係尺度（全項目で天井効果、フロア効果は認められなかった）について、105 名の回答のうち、無記入であった 2 名を除いた 103 名をサンプルとして主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子抽出基準を固有値 1 以上とし、5 因子を採択した。表 5 には、斜行回転後の因子負荷量および因子間相関を示した。

第 1 因子は「開示者と一緒にいると落ち着かない感じがするようになった」「開示者とは顔を合わせづらくなった」「開示者とはかかわりすぎないようにした」「開示者を苦手だと感じるようになった」などの質問項目で因子負荷量が高く、開示者と一緒にいることへの気まずさや不安、さらに開示時よりも開示者と距離をとっている状態と考えられることから「よそよそしさ」と命名した。第 2 因子は「開示者に接するとき、これまでよりも自分に正直でいられるようになった」「これから困ったことが起きたら開示者に話そうと思った」「開示者への信頼が増した」「開示者の話をもっときいてあげたいと思うようになった」など、開示者への信頼が高まり、開示者の前では素直に振る舞える状態であると考えられることから「信頼にもとづく率直さ」と解釈した。第 3 因子は「前よりも開示者のために

何かしてあげたいと思うようになった」「開示者をいっそう大切に感じるようになった」と

いう 2 項目が高負荷をもつことから、「献身的親愛」と解釈した。第 4 因子は「開示者と

表 5 自己開示後の関係尺度の因子分析（因子負荷量と因子間相関）

質問項目		因子 1 (よそよそしさ)	因子 2 (信頼に基づく率直さ)	因子 3 (献身的親愛)	因子 4 (気軽さ)	因子 5 (意図しての聞き役)
開示者と一緒にいると落ち着かない感じがするようになった		.83	.06	-.09	.01	.11
開示者とは顔を合わせづらくなった		.80	.27	-.11	-.23	-.03
開示者とはかかわりすぎないようにした		.79	-.11	.06	.13	-.06
開示者を苦手だと感じるようになった		.76	-.24	-.04	.26	-.04
開示者と一緒にいると無力感が募るようになった		.63	.02	.12	-.27	.18
開示者と一緒にいることに不安を覚えた		.60	-.09	.00	.09	.06
開示者の前では自分らしく振舞えなくなった		.39	.08	.17	-.08	-.03
開示者に接するとき、これまでよりも自分に正直でいられるようになった		.18	.94	-.07	.12	-.08
これから困ったことが起きたら開示者に話そうと思った		-.02	.81	-.08	-.08	-.24
開示者への信頼が増した		-.05	.74	.03	.20	-.10
開示者の話をもっときいてあげたいと思うようになった		-.01	.69	.19	-.09	.13
開示者に気をつかわなくなった		-.12	.42	-.04	.20	.11
開示者への親しみが増した		-.27	.41	-.04	.29	.30
メールや電話など接触する回数が増えた		.06	.24	.07	.23	.22
前よりも開示者のために何かしてあげたいと思うようになった		.17	-.03	1.01	.08	-.09
開示者をいっそう大切に感じるようになった		-.22	.10	.63	-.02	.00
開示者と気軽に話せるようになった		.01	.23	.07	.74	-.14
開示者と一緒にいるとき聞き役になることが多くなった		.28	.07	.02	-.05	.61
開示者とはあえてこれまでどおりに接するようにと考えるようになった		.12	.20	.15	.09	-.45
因子間相関	因子 1 (よそよそしさ)	—	-.37	-.35	-.09	-.29
	因子 2 (信頼に基づく率直さ)		—	.57	-.01	.20
	因子 3 (献身的親愛)			—	.03	.28
	因子 4 (気軽さ)				—	.12

気軽に話せるようになった」という 1 項目のみが高負荷をもち、「気軽さ」と命名した。

第 5 因子は「開示者と一緒にいるとき聞き役になることが多くなった」が正の、「開示者とはあえてこれまでどおりに接するようにと考えるようになった」が比較的高い負の負荷量を示すことから、「意図しての聞き役」と解釈した。

因子間相関をみると、第 4 因子「気軽さ」以外の各因子には.28 以上の相関が複数認められた。特に、第 2 因子「信頼にもとづく率直さ」と第 3 因子「献身的親愛」との間には.57 の相関が認められた。また因子間相関に特徴的な点としては、第 1 因子「よそよそしさ」が第 2 因子、第 3 因子、第 5 因子に共通して.30 程度の負の相関値を示していたことであった。各因子の Chronbach の α 係数を算出したところ、「よそよそしさ」で $\alpha = .839$ 、「信頼に基づく率直さ」で $\alpha = .862$ 、「献身的親愛」で $\alpha = .784$ 、「意図しての聞き役」においては $\alpha = .337$ であった。なお「気軽さ」因子構成項目に関しては一項目しかなかったため α 係数は算出出来なかった。第 1 因子から第 3 因子に至るまでは、 α 係数は比較的高い値を示した。

同様に、自己開示後の被受容感・被拒絶感尺度（全項目で天井効果・フロア効果は認められなかった）について、105 名の回答のうち無記入であった 2 名を除いた 103 名をサンプルとして主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子抽出基準を固有値 1 以上とし、3 因子を採択した。斜交回転後の因子負荷量と因子間相関の結果を表 6 に示した。第 1 因子は、「開示者は私を大切にしていると感じるようになった」「私は開示者と一緒にいると心地よいと感じるようになった」「開示者は私を理解していると感じるようになった」など近江ら（2004）で受容因子に影響を受けるとされている 5 項目が高負荷を示し、被開示者が開示者から暖かく受け容れられていると感じている状態であると考え、「受容」と命名した。第 2 因子は、「開示者は私につらく当たることが多くなった」「開示者は私をよく批判するようになった」などが高負荷を示し、被開示者が開示者からつらく当たったり批判されたりするなどの攻撃を受けていると感じ、かつ突き放されるのではないかと不安に思っている状態であると考え、「攻撃への不安」と命名した。第 3 因子は、「私は開示者からないがしろにされていると感じるようになった」「私は開示者から背を向けられていると感じるようになった」という 2 項目が比較的高い因子負荷量をもつことから、被開示者が開示者から関心に向けられていないと感じている状態であると考え、「無視」と命

名した。因子間相関を見ると、被拒絶感に当たる第 2 因子「攻撃への不安」と第 3 因子「無視」との間に.49 の相関が認められた。

Chronbach の α 係数を算出したところ、「受容」で $\alpha = .810$ 、「攻撃への不安」で $\alpha = .669$ 、「無視」で $\alpha = .603$ であった。

表 6 自己開示後の被受容感・被拒絶感尺度の因子分析（因子負荷量と因子間相関）

質問項目		因子 1 (受容)	因子 2 (攻撃への不安)	因子 3 (無視)
開示者は私を大切にしていると感じるようになった		.84	-.10	-.04
私は開示者と一緒にいると心地よいと感じるようになった		.72	.08	-.09
開示者は私を理解していると感じるようになった		.66	-.08	.15
開示者は私を受け容れてくれていると感じるようになった		.62	.03	-.19
私は開示者に守られていると感じるようになった		.62	.08	.21
開示者は私につらく当たることが多くなった		.03	.72	.05
開示者は私をよく批判するようになった		.02	.72	-.06
私が少しでも失敗したら開示者は私を見捨てるだろうと感じるようになった		-.07	.46	.05
私は開示者からないがしろにされていると感じるようになった		-.05	.01	.75
私は開示者から背を向けられていると感じるようになった		.09	.02	.59
因子間相関	因子 1 (受容)	—	.02	-.18
	因子 2 (攻撃への不安)		—	.49

また、自己開示後の開示者との関係と被開示者の被受容感・被拒絶感との関連を検討するために、関係尺度で得られた 5 因子の因子得点と被受容感・拒絶感尺度の 3 因子の因子得点との間の相関係数を算出した（表 7、因子得点は共に回帰法により算出した）。

表 7 関係尺度因子得点と被受容感・被拒絶感尺度因子得点間の相関係数

被受容感・ 被拒絶感 関係	受容	攻撃への不安	無視
よそよそしさ	-.31**	.43**	.69**
信頼に基づく 率直さ	.73**	-.13	-.28**
献身的親愛	.66**	-.06	-.37**
気軽さ	-.05	.18	.11.
意図しての聞き役	.19	-.09	-.30**

** $p < .01$ * $p < .05$

その結果、「よそよそしさ」は、「受容」との間に-.31の弱い負の、「攻撃への不安」「無視」との間に.43、.69の中程度の正の相関が見られた。「信頼に基づく率直さ」及び「献身的親愛」には、「受容」との間に.73、.66の中程度から強い正の、「無視」との間に-.28、-.37のやや弱い負の相関がそれぞれ示された。「気軽さ」は、被受容感・被拒絶感尺度のどの因子とも相関が見られなかった。「意図しての聞き役」は、「無視」との間に-.30の弱い負の相関が見られた。

3-9. 自己開示時の被開示者の行動と自己開示後の被開示者と開示者の関係

自己開示時の被開示者の行動と自己開示後の被開示者と開示者との関係の両者の関連について、行動尺度因子の各因子得点と関係尺度因子及び被受容感・被拒絶感尺度因子の各因子得点の相関係数を算出した（表 7）。相関係数の検討にあたって、本研究のサンプル数が 100 程度になることから、ここでは有意水準よりも相関係数そのものを重視し、相関係数.30 以上及び-.30 以下の値に特に着目して結果を整理した。なお、ここでは.20~.35 弱い正の相関、.35~.50 を中程度の正の相関、.50~.65 を比較的強い正の相関、.65 以上を強い相関があると表記し、負の相関についてもそれに準じた表記をしていく。

表 7 行動尺度因子得点と関係尺度因子及び被受容感・被拒絶感尺度因子得点との相関係数

行動尺度因子	関係尺度因子					被受容感・被拒絶感尺度因子		
	よそよそしさ	信 頼 に 基 づ く 率 直 さ	献身的 親愛	気軽さ	意 図 し て の 聞 き 役	受 容	攻 撃 へ の 不 安	無 視
言語反応の少な さ	.30**	-.05	-.03	-.34**	.03	.08	.07	.11
気遣い	-.41**	.48**	.33**	.39**	.08	.44**	-.09	-.35**
興味喪失	.15	-.39**	-.27**	-.21	-.15	-.29**	.31**	.13
一体感	-.12	.52**	.29**	.32**	-.06	.30**	-.12	-.04
拒絶	.59**	-.35**	-.27**	-.37**	.04	-.31**	.29**	.44**
意識散漫	.21*	-.23*	-.10	-.09	-.16	-.17	.22*	.20
遮断	.19	-.04	.03	-.11	-.07	-.02	.11	.19
解決探索	-.07	.20	.15	.13	.21*	.22*	-.06	.01

** $p < .01$ * $p < .05$

ネガティブな自己開示を受けた際、被開示者の「言語反応の少なさ」という行動は、関係尺度因子においては開示者に対する気まずさや不安を増加させる傾向（「よそよそしさ」因子で.30 の弱い正の相関、以下（）内の数値は相関係数を示す）が認められ、一方で開示者への気軽さを減少させる傾向（「気軽さ」因子で-.34）が認められた。また、「言語反応の少なさ」という行動では、被受容感・被拒絶感因子との有意な相関は認められなかった。「気遣い」行動では、「言語反応の少なさ」行動とは逆に、開示者に対する気まずさや不安を低減させる傾向（「よそよそしさ」因子で-.41）が認められ、開示者への信頼や親しさを増加させ、開示者に対して率直であろうとする傾向（「信頼に基づく率直さ」因子で.48）や、開示者を大切に思い尽くす傾向（「献身的親愛」で.33）、開示者への気軽さを増加させる傾向（「気軽さ」で.39）が認められた。また、「気遣い」という行動をとることによって、開示者から暖かく受け容れられているという実感を増加させる傾向（「受容」で.44）が認

められ、開示者から関心を向けられていないという実感を低減させる傾向（「無視」で-.35）が認められた。「興味喪失」という行動では、開示者への信頼や親しさを低減させ、開示者に対して率直でいられない傾向（「信頼に基づく率直さ」因子で-.39）、開示者から攻撃されることへの不安を増加させる傾向（「攻撃への不安」で.31）が認められた。「一体感」行動では、開示者への信頼や親しさを増加させ、開示者に対して率直であろうとする傾向（「信頼に基づく率直さ」因子で.52）が強く、開示者を大切に思い尽くす傾向（「献身的親愛」で.29）、開示者への気軽さを増加させる傾向（「気軽さ」で.32）も認められた。また、「一体感」という行動は、開示者から暖かく受け容れられているという実感を増加させる傾向（「受容」で.30）が認められた。「拒絶」行動では、開示者に対する気まずさや不安を増加させる傾向（「よそよそしさ」因子で.59）が強く、開示者への信頼や親しさを低減させ、開示者に対して率直でいられない傾向（「信頼に基づく率直さ」因子で-.35）、開示者への気軽さが減少する傾向（「気軽さ」で-.37）が認められた。また「拒絶」という行動をとることによって、開示者から暖かく受け容れられている実感も低減させる傾向（「受容」で-.31）、開示者から関心を向けられていないという実感を増加させる傾向（「無視」で.44）が認められた。「意識散漫」「遮断」「解決探索」の3つの行動においては、.30以上かつ-.30以下の相関係数は認められず、高い値でも.23にとどまった。関係尺度因子に着目すると意図しての聞き役以外の因子で複数の行動尺度との関連が認められたが、「意図しての聞き役」という関係については「解決探索」という行動のみによって促進される傾向（.21）が若干認められた。

第4節 考察

本章では、ネガティブな自己開示を被開示者が受けた場合を出発点としており、それを前提として、被開示者の感情、行動、さらに被開示者と開示者の関係に関して、各々の特徴を、また各々の関連性の特徴を検討した。

4-1. 被開示者が受けたネガティブな自己開示

被開示者が受けたネガティブな自己開示の内容は、本研究では「家庭に関すること」「恋愛に関すること」「人間関係に関すること」「学業に関すること」「精神・身体に関すること」

の 5 つに分類された。榎本（1997）は、話したくても話しにくい話題について大学生を対象に自由記述調査を行い、「恋愛や異性に関すること」「生き方や将来に関すること」「友人関係に関すること」「過去の重大な失敗やいやな出来事」「家族の問題」など 9 つにその内容を分類している。この榎本（1997）の研究は開示者に焦点を当てた結果であり、被開示者の受け止め方に着目する本研究の結果と直ちに比較することは難しいが、両者はおおむね類似した分類結果といえよう。開示者にとって話しにくい自己開示の内容は、被開示者もネガティブな自己開示として少なからぬ精神的衝撃を受けるであろうことが推察された。

被開示者が想起したネガティブな自己開示には、開示者の属性によって開示される内容や時期に偏りが認められた。母親から受けたネガティブな自己開示の想起は小学生から高校生にわたり、内容も家庭に関することに限られるのに対し、同性の友人や異性の友人、恋人からのそれは中学 2 年以降漸増する傾向にあり、様々な内容のネガティブな自己開示が想起されていた。本研究はネガティブな自己開示の有無を調査したものではないので、この結果が直ちに大学入学以降に母親からのネガティブな自己開示が存在しないことを示すものではない。本研究での回答は複数の人物からのネガティブな自己開示による精神的衝撃を比較して、より衝撃の強いものを回答したと考えることができる。開示された内容が普段の開示者から想像し難い内容であるほど、被開示者が受ける衝撃は大きくなる可能性がある。また本研究では、記入しても差し支えない範囲でのネガティブな自己開示について回答してもらうという教示を行った。これはネガティブな自己開示の内容を想起することが精神的苦痛を伴うことからの配慮であったが、回答者の防衛がなされ、被開示者にとって最もネガティブな自己開示の回答が避けられた可能性もないとはいえない。

また、想起されたネガティブな自己開示の時期の特徴としては、特に恋人、同性の友人、異性の友人からの自己開示が中学 2 年から漸増していたことであった。本研究は大学生を対象に質問紙調査を行っているが、この青年期においては、児童期とは異なり共通の悩みや個人の悩みを共感しあうという精神的つながりによって友人を選ぶ時期であり、生活の大部分が友人との交流を中心に進む時期であるともいえる。被開示者に開示者と似たようなネガティブな経験がある場合、あるいはそれに似たような経験をしうる場合、それと類似したネガティブな自己開示を想起しやすくなることも考えられる。しかし、逆にネガティブな自己開示が、被開示者にとって経験したことの無い内容の場合でも印象に残りやす

いという可能性も否定できない。いずれにしても、青年期に友人との交流を中心に生活が進むということは、その分友人との人間関係でのトラブルも生じやすくなることが予想される。結果として大学生において友人関係での問題が最も意識されやすい問題（八田，2009）となり、被開示者においても開示者と類似の人間関係上のトラブルを意識しやすいといえよう。また、自己開示の返報性という点から、被開示者と開示者との間で人間関係に関するネガティブな自己開示が相互に繰り返されていたことが人間関係に関する自己開示の想起を促進したとも考えられる。

4・2. 自己開示時の被開示者の感情と行動

ネガティブな自己開示がなされた時に被開示者が抱きやすい感情は、開示者のために何かをしたいという思いであり、また衝撃であり、悲しみであった。その他に、達観や同情や怒り、開示者に信頼された嬉しさなど様々な感情が認められた。さらに、単一の感情カテゴリのみならず複数の感情カテゴリにまたがる回答も 2 割程度あった。「戸惑い」という感情カテゴリにも、「どうしたらいいかわからない」という背景に複雑な感情が潜んでいる可能性も考えられる。ネガティブな自己開示を受けた被開示者に複雑な感情が同時に生起しているのか、それとも何らかの感情が生起し、それがきっかけとなって他の感情を生起させているのか、「戸惑い」の背景の感情は何か。これらの点に関して本研究では明確な回答を示す資料を提示することができなかったが、研究方法の洗練も含め、今後の課題の一つといえよう。

自己開示時の被開示者の行動については、「言語反応の少なさ」「気遣い」「興味喪失」「一体感」「拒絶」「意識散漫」「遮断」「解決探索」の 8 因子が抽出された。「言語反応の少なさ」「気遣い」の両因子に高負荷を示す項目数についてはある程度満足できるものであったが、「興味喪失」から「解決探索」までの因子に高負荷を示す項目数が少なく、サンプル数を増やしての検討のみならず、行動尺度の再検討が必要かもしれない。また、因子間相関において、「興味喪失」因子と他の多くの行動因子との間に弱い相関が認められたことが特徴といえよう。具体的には、「拒絶」「意識散漫」両因子との間に弱い正の相関が、「一体感」「解決探索」両因子との間にそれぞれ弱い負の相関が認められた。つまり、自己開示内容に興味を失うような場合、同時に開示者とかかわることに消極的となり、他の話を始める

ようになり、自分のことのように感じられなくなり、開示者とともに対処を考える行動も生じにくくなる傾向が多少なりとも考えられる。さらに、「拒絶」因子と「意識散漫」因子との間に中程度の正の相関が、「気遣い」因子と「一体感」因子との間に弱い正の相関が認められてもいた。この本研究結果は、実際の場面で複合的な行動がなされる可能性を示唆しているといえよう。

このような被開示者の感情や行動については、一方で被開示者個人の特性としてとりやすい行動や生じやすい感情があることにも注意する必要があるだろうし、開示者との親密度の違いによっても生起する感情やその際とりうる行動が異なることも見落とすことはできない。さらに被開示者の置かれた状況、例えば相談として自己開示を受けたのか、あるいはそういった何らかの開示者からの宣言なしに、被開示者が話を聞く準備が整わない状況で自己開示を受けたのかなどといった点、すなわち自己開示の適切性の背景となる状況にも注意が必要であろう。このような点に関しては、被開示者一人ひとりに応じた丁寧かつ細やかな検討方法、すなわち半構造化面接などによる検討が必要と考える。

さらに、自己開示時における被開示者の感情と行動の関連について、各感情に該当する被開示者のみを抽出して各行動因子得点平均値の差を検討した。その結果、被開示者の抱く自己開示時の感情によっては、その際に生起する行動に差が認められた。被開示者が開示者の役に立ちたいなど「開示者への寄り添い」感情を抱いている場合、開示者を気遣う行動が「興味喪失」「意識散漫」「遮断」行動よりも生じやすいことが示された。一方、

「達観」感情においては F 値に有意差が認められたものの、多重比較において各行動因子得点平均値間の差は認められなかった。本研究においては、各感情に該当する被開示者のみを抽出しているため、全体的にサンプル数が少なく、行動因子得点の標準偏差が大きくなったこともこの一因と考えられる。既に述べたように、複数の感情を抱いている被開示者も少なからずおり、さらに自己開示内容や自己開示の適切性など他の要因も考慮した上での感情と行動の関連を再検討する必要があるだろう。また、被開示者が開示者から「信頼された嬉しさ」を感じるとき、他の多くの行動に比較して頷く反応を主とした「言語反応の少なさ」行動が減少する傾向が認められた。つまり、被開示者が、開示者からの信頼の証としてネガティブな内容の自己開示を受けたと感じ、それに喜びを感じる時、言語反応は多くなり、積極的にアドバイスをする傾向にあった。開示者から信頼され、期待されてい

ると感じる時、それに沿うために、被開示者はアドバイスをしたり、質問をしたりなどの言語反応を積極的に出すようになるのではないかと考えられる。カウンセリングに目を転じると、十分な信頼関係が構築される以前は特に、不用意なアドバイスや意見などのカウンセラーの言語反応は、クライアントとの信頼関係を後退させる要因にもなり得る。そのため、カウンセラーは、頷くなどの非言語反応で、またクライアントを受け容れることを目的とした言語反応によってクライアントとの信頼関係を促進しようとする。本研究での被開示者の行動は、一見するとカウンセリングとは逆の反応のようにも見える。被開示者の積極的アドバイスが嬉しさゆえの反応であるとするれば、それは専門家と非専門家の違いとも考えられる。一方で、それが既に築かれた信頼関係に基づくアドバイスなのだとすれば、カウンセラーの対応と異なるものだとはいえなくなるだろう。カウンセラーとクライアントの関係と一般の対人関係の違いについて、ザロラ（1987）は、クライアントは友人ではなく、あくまで他人であって、クライアントはセラピストを人生におけるさまざまな問題を扱う専門家とみなしていると指摘している。このように、カウンセリングでの関係と一般の対人関係は、その役割においてそもそも異なるものでもあり、一概に比較することはできない。しかし開示者・被開示者双方が両者の関係において、自身の役割をどのように認識しているか、また、どのような役割を相手に期待しているのかといった点での検討は今後重要であろう。

4-3. 自己開示時の被開示者の行動と自己開示後の被開示者と開示者の関係

自己開示後の関係尺度について因子分析を行った結果、「よそよそしさ」「信頼に基づく率直さ」「献身的親愛」「気軽さ」「意図しての聞き役」の5因子が抽出された。「よそよそしさ」「信頼に基づく率直さ」以外の因子に高負荷を示す項目の数は少なく、関係尺度をより洗練させていくことが必要かもしれない。因子間相関では、「気軽さ」因子以外の因子間には相関が認められた。特に、「信頼に基づく率直さ」「献身的親愛」因子の間には中程度の正の相関が、両因子と「意図しての聞き役」因子の間に弱い正の相関が認められた。また、「よそよそしさ」因子は上記3因子との間に弱い負の相関が認められた。

被受容感・被拒絶感尺度の因子分析においては、「受容」「攻撃への不安」「無視」の3因子が抽出された。この尺度を作成した近江ら（2004）の研究では被受容感・被拒絶感を

与える対象に分けて分析しているため、開示者をコミにして分析をした本研究の結果と直接比較はできないものの、おおむね同種の因子が抽出されたといえよう。近江ら（2004）の結果と若干異なる点は、「私が少しでも失敗したら〇〇（〇〇は本研究においては開示者とした）は私を見捨てるだろう」という質問項目が、「無視」因子ではなく「攻撃への不安」因子に高負荷をもったことである。ただし、「攻撃への不安」「無視」の被拒絶感に関わる2つの因子は、本研究でも近江ら（2004）同様に中程度の正の相関が認められており、両因子は比較的類似の因子として被拒絶感を構成するものとも考えられる。

さらに、関係尺度と被受容感・被拒絶感尺度の関連を検討した。その結果、被開示者と開示者の関係と、開示者について被開示者の感じる被受容感・拒絶感に関連があることが示された。つまり、被開示者と開示者の間がよそよそしくなると、被開示者は開示者から暖かく受け容れられる実感は減少し、その代りに開示者から攻撃されるかもしれないと不安に思い、関心を向けられなくなると感じるようになるのである。一方、開示者からの信頼を感じ、その信頼に応えるように率直であるような関係や、開示者のために尽くしたいと感じる関係であればあるほど、開示者から関心を向けられていないという実感は低減し、開示者から暖かく受け容れられているという実感が増加することが示された。よそよそしい関係であるということは、自己開示以前と比較して、被開示者が開示者との間の距離を遠くなったと感じ、実際にも開示者との距離をとっている状態と考えられ、すなわちそれは被開示者が開示者を受容しきれていない状態を示しているのかもしれない。さらに、被開示者は開示者を受容しきれていないため、開示者からも受容されていないと感じるだけでなく、攻撃されたり無視されたりすることに不安を覚えるのかもしれない。またよそよそしい関係となる背景には、被開示者が開示者の期待する役割に沿えないことへの後ろめたさがあるかもしれない。開示者に対して後ろめたさを感じているのは被開示者であるが、その感情を開示者に投影して、開示者がネガティブな自己開示をしたことに後ろめたさを感じていると認識しているとも考えられる。あるいは、被開示者が受容（あるいは拒絶）しているために、開示者から受容（あるいは拒絶）されていると感じている可能性が考えられる。つまり、被開示者自身が開示者を受容しているか拒絶しているかによって、被開示者が開示者から受容されているか拒絶されているかが強く方向づけられるとも考えられる。

自己開示時の被開示者の行動がその後の被開示者と開示者の関係に与える影響については、ネガティブな自己開示を受けた時に、被開示者が話に興味を持てずいたり拒絶したりというような、開示者に関わろうとしない行動をとる場合、その後の関係では開示者に対して距離を感じ、開示者から攻撃されるかもしれないという不安を抱きやすく、開示者から関心を向けられていないと実感する傾向が示された。その一方で、被開示者が開示者に対して寄り添う行動をとる場合、また開示者を気遣う行動をとる場合、その後は開示者に率直であり尽くせるような関係となり、開示者から暖かく受け容れられていると実感する傾向が示された。開示者の話に興味を持てず、また面倒になったり、あるいは開示者に関わろうとしない行動の背景にあるのは、被開示者がネガティブな自己開示そのものや開示者を手に負えないと感じていることが考えられる。また、開示者に関わることで確実に被開示者の時間を費やすことになり、その時間的負担を軽減したいということからの行動であるとも考えられる。そして、被開示者は、このような被開示者の負担の状態を理解していないように思える開示者に対して不信感を抱くため、よそよそしい関係になると考えられる。一方、被開示者が開示者に真剣に向き合い、受け止めようとする行動が開示者に伝わっていると被開示者が実感できる時、被開示者との結びつきが強くなるのではないだろうか。松浦（1992）は、親しい友人から援助を受けた場合、知人や初対面の人物からの援助を受けた場合に比べて、被援助者の受けた援助と同種の援助を行いやすいという結果を示している。ネガティブな自己開示を親しい他者から受けた時、被開示者がそれを受け止めようとする行動は、一種の援助行動とも考えることができる。こうした経緯の後、被開示者が開示者に対して自己開示の返報を行うことがあるならば、開示者は被開示者の先の行動に基づいて被開示者の話を受け止めようとするという可能性も考えられる。

第5節 まとめ

本章では、被開示者に焦点をあて、ネガティブな自己開示を受けた際の被開示者の感情や行動、及び開示者との関係についてそれぞれの特徴やそれぞれの関連を探索的に検討した。これまでの自己開示研究は、開示者に注目して自己開示という現象を検討しているものが多く、被開示者に関心に向けて自己開示をとらえているものは少なかった。本研究は、自己開示における被開示者に関心に向けている点が、ひとつの特徴といえる。それは、開

示者の自己開示から出発し、その際の被開示者の感情や行動、さらには両者の関係に至る二者間の相互作用過程として自己開示を広汎に捉えたいという前提からのものでもあった。

また、本研究は、被開示者に関する研究が少ないということから探索的研究という方法を試みたが、それによって様々な興味深いデータを得ることができた。そのデータから、被開示者が開示者から受けるネガティブな自己開示について、被開示者の感情や行動の実態を知る手がかりを提出できたと考える。また、それにとどまらず、被開示者の感情や行動の背景、開示者との関係の背景について、様々な可能性を探ることができたと考える。

しかしながら、本研究では多くの要因を含む質問紙調査という研究方法を採用したため、被開示者個々人の特性などを丁寧に検討することはそもそも難しかった。具体的には、被開示者個々人の生起しやすい感情や行動など被開示者個人の特性要因、被開示者がどのような状況や文脈で開示者から自己開示を受けたのかという状況要因などを挙げることができる。被開示者と開示者の相互作用過程として自己開示を位置づけた上で、特性要因や状況要因なども含め、被開示者に焦点を当てた研究を進めていくために、今後は被開示者との面接による詳細かつ丁寧な検討が重要と考える。

第四章

ネガティブな自己開示における被開示者の感情・行動及び開示者との関係に関する研究（面接調査）

第1節 目的

第三章においては、大学生集団を対象として、被開示体験について尋ね、その一般的な傾向を捉え、様々な可能性について記述した。しかしながら被開示者個々人に目を向けると、この一般的な傾向と必ずしも一致しない部分もあるとも考える。そこで本章においては、前章で記述した一般的傾向を踏まえつつも、その一般的傾向とは異なる部分について注意しながら、3名の被開示者個々人の体験に即して検討していくことを目的として面接調査を行った。また、被開示者と開示者との間の関係の変遷を可視化するために関係性ラインという方法を発案し、導入した。

関係性ラインとは、構成的グループエンカウターの課題として用いられるライフラインを着想の基としている。ライフラインとは、自分の感情を中心にした比較的容易に描ける自分史である（河村，2000）。ライフラインを描くことにより、①過去から現在に至るまでの自分の生きてきた歴史に一貫性を持つことができ、②多くの時間を過ごす集団や社会の中での自分の位置について客観的に知るきっかけが得られるという、主に二つの効果がある。この考えに基づき被開示者の感情を中心として、開示者と出会ってから現在に至るまで経験してきたことに思いを馳せ、今後の関係について見つめることが出来ると考えた。つまり、関係性ラインを描くことによって被開示者自身が開示者との関係の中で感じてきた肯定的な感情や否定的な感情を一本の線という一貫したものとして可視化するだけでなく、今後の開示者との関係についても考えることが出来るという利点があることが予測される。

そこで、本章では、面接と関係性ラインという二つの方法を用いて、被開示者が体験してきた経験だけでなく、被開示者個々人、あるいは状況の特徴も踏まえながら被開示者一人一人の感情や行動について細やかに尋ねながら被開示者と開示者との間の関係やその変

化の過程に迫っていきたい。被開示者個々人の特徴の把握に際しては、第三章で得られた一般的特徴との比較も行うことで、より明確に示したい。さらに本章においては、自己開示が被開示者と開示者の相互作用過程であることを前提とする。その上で、自己開示を受けた際の被開示者の感情や行動、開示者との関係について検討していく。なお、対象者の概要については、事例の検討に付して記述する。

第 2 節 方法

【対象者】

質問紙調査（第三章）の対象者 105 名のうち、調査協力を承諾してくれた学生 3 名（いずれも女性）を本調査の対象者とした。

対象者とは調査者が直接メールのやり取りをし、面接調査を行う時間、場所、面接の趣旨について説明をした上で日程を定めた。

【調査手続き】

調査は 2011 年 1 月中旬に行った。被開示者である対象者と開示者の間の関係がどのように変化したのか、対象者が実際にどのような場面での対象者が自己開示されたのかについて、関係性ラインとして図示してもらった（凡例を図 8 に示した）。関係性ラインは、A3 の紙面上中央に横軸として時間の経過を表し、左端に縦軸として対象者と開示者の間の関係の深さを表した。なお、自己開示を受けた時期については矢印で示してもらった。

調査に先立って、分析の資料とするためにボイスレコーダーで録音する旨、話したくないことは話す必要はない旨、個人が特定されないよう修正を加えた上で論文として公表させていただきたい旨、データの扱いには最大限配慮する旨を説明し承諾を得た（承諾書については資料 1）。また、ボイスレコーダーに録音された音声データを元に作成した逐語記録は、対象者の守秘に関わる部分について修正を加えた上で対象者に確認してもらい、論文掲載について承諾を得た。面接調査時間はそれぞれ 70 分程度であった。面接場所は人の出入りがないように、個室で行った。

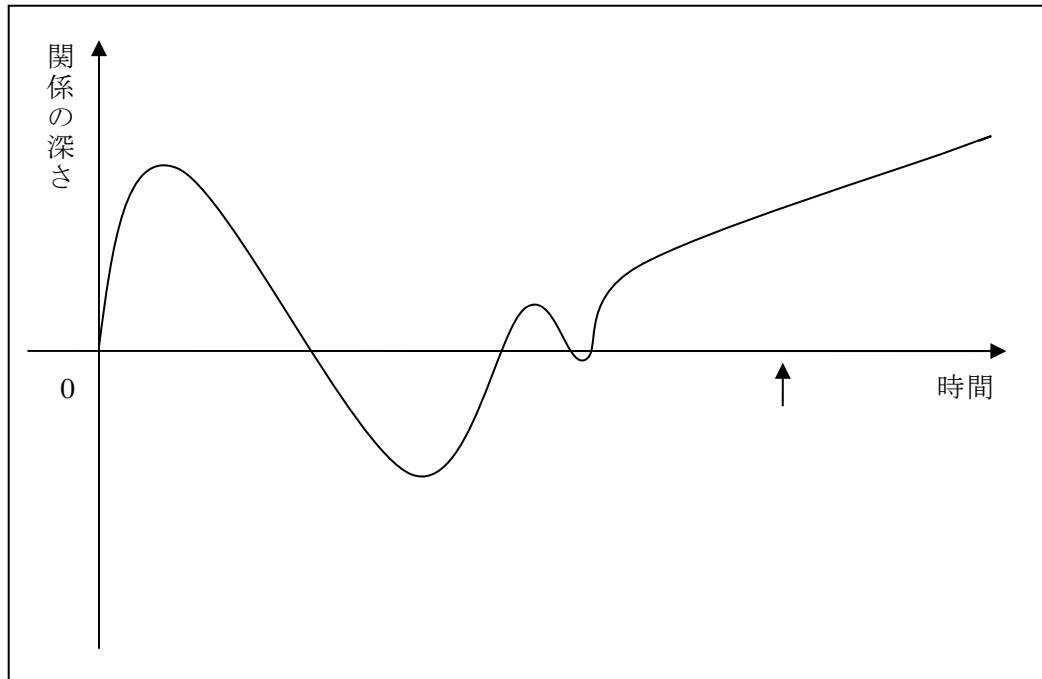


図 8. 関係性ラインの凡例

調査の具体的手続きは以下に示す通りである。

- ① 対象者に、質問紙調査で回答したネガティブな自己開示を受けた体験、および開示者との出会いから現在に至るまでを想起してもらう時間を冒頭に 1～2 分程度とった。その上で、被開示者である対象者と開示者との出会いから現在に至るまでの経過を関係性ラインとして書き表してもらった。
- ② 描いた感想を尋ねた上で、関係性ラインの始点から終点に至るまでの経緯について話してもらった。

インタビュー中は、対象者の話が一区切り付いた時点で、対象者の語った内容を明細化する質問にとどまらず、対象者の語る内容や感情についてフィードバックをしたほか、調査者の感想も述べている。すべての対象者のインタビューで押さえるべきと判断した内容を以下に示す。

ア．開示者との親しさを尋ねる質問

イ. 想起した出来事について尋ねる質問

ウ. 対象者の特性についての質問

エ. 関係性ラインに関する質問

大きく分けてこの4つのカテゴリに渡って質問した。まず、ア.の開示者との親しさを尋ねる質問として、開示者との親しさを1から6までの数字で表してもらう質問等がこれに該当する。イ.の想起した出来事について尋ねる質問としては、被開示者が当該被開示体験を想起した理由について、被開示者が開示を受けた時の具体的な状況について、開示者の特徴についてなどが含まれる。ウ.の対象者の特性についての質問としては、開示者から自己開示を受けた時の対象者の感情や行動の他に、開示者以外の他者からも開示を受けた経験やその際の対象者の感情や行動について、対象者が対人関係上留意していることについてが含まれる。エ.の関係性ラインに関する質問としては、ラインの浮き沈みの背景についてなどが該当する。

調査を始める前に以下のように教示をした。

「お忙しいところ、ご都合をいただきまして本当にありがとうございます。今日は、以前質問紙調査でお答えいただきました、否定的な内容の打ち明け話をされた時のことなどについてのお話をお伺いしたいと思っております。その際に、まず、打ち明け話をされた相手の方との関係の変化を線にして表していただきたいと思いますと思っております。時間は1時間を少し過ぎるくらいを予定しています。お時間の方は大丈夫でしょうか？」

承諾を得た後、「それではもう少し詳しくご説明いたします。お話したくないとお感じになった場合は、そこでやめることも可能です。また、お話しづらいことを無理にお話いただく必要はありません。お話できる範囲のことを教えていただけましたら幸いです。今回お話を頂いたことや、この場でお書きいただいたことに関して、出来る限り最大限の注意を払い、個人が特定されないように配慮をいたしまして、論文や研究発表などで公表させていただきたいと思っております。その際には、書き上げたものに目を通してご確認いただいた上でご判断していただければと考えておりますが、いかがでしょうか。また、大切なお話をいただきますので、ICレコーダーで録音させていただくこと、またその内容についてメモをとらせていただくことを了解していただけないでしょうか。ICレコーダーの

データやメモに関しては厳重に保管し、研究以外の目的では使うことは決していましたせん。IC レコーダーでの録音やメモについてご了解いただけますでしょうか。」

守秘の取り扱いに関して承諾を得た上で、今回の調査の趣旨および関係性ラインの描き方について、以下のように説明を加えた。

「それでは、さっそく始めさせていただきます。まず、打ち明け話をされた相手の方と出会った頃のことを少し思い出してください。その方と出会った時の親しさを 0 として、そこから今に至るまで、あなたとの間でどのようなことがあったのでしょうか。あなたと相手の方の関係はどのようになっていったのでしょうか。それを一本の線で表してみてください。横軸は相手の方と出会ってから今に至るまでの時間、縦軸にはあなたと相手の方の関係の深さを表します。下に行くほど関係は浅く、上に行くほど関係が深くなるとお考えください。」

【分析方法】

質問紙調査での行動尺度・関係性尺度・被受容感被拒絶感尺度、各尺度における対象者各人の因子得点の傾向について検討した上で、面接調査における語りで得られた開示者との関係、及びネガティブな自己開示を受けた際の感情や行動について質問紙調査と出来る限り照らし合わせながら関係の変遷についてたどる。また、関係性ラインについては、ラインの浮沈の際の出来事やその際の対象者の感情について記述し、個人特性の検討を加えることとする。

第3節 まとめ

本章では、被開示者がネガティブな自己開示を受けた場合の感情の動き、その際の行動およびその後の開示者と被開示者の関係について、対象者各々の特徴を検討した。

開示時期に着目すると、A、B は青年期の開示を想起していた。青年期は他者と関わることなしに生きていくことの出来ない関係的存在が特徴的な時期であるといえる。そこで A は家族に関すること、B は恋愛に関することを開示されている。榎本（1997）や篠崎

(1996)の指摘するように、そのどちらも、青年期の対象者にとっては関心の高い出来事であったことが伺える。またその内容も、被開示者である A,B にとっては解決しようにもできないことであったことが予想される。そのような中で A,B は共通して、開示されたことに対して戸惑っていたことが語られた。しかしその後、A においては「何をいわなくてもいい、ただ聞こう」と積極的に傾聴する構えを見せ、実際にそのように行動したことが語られている。一方 B においては、何もいえないことにもどかしさを覚え、それを払拭することが出来ずに聞くしか出来なかったと不全感を抱いているように思われた。B のこれは、いわば消極的傾聴とでも言うべき行動であったようにも思われる。A,B の違いはどこにあるのだろうか。A は、まず開示されたことに対して戸惑っていた。これはあくまで A 自身の主観であって、そこに開示者は存在していないのではないだろうか。そこから、次第に開示者の存在を認め、A なりに開示者の状況を了解することによって、開示者に対するまなざしが芽生えたのではないかと考える。そしてそのことによって、開示者の話に耳を傾ける行為への意味を見出すことが出来たのではないだろうか。一方、B においては、開示者の置かれた状況を推察してはいたものの、B と開示者以外にも複数の他者がいる状況であったことから、他者の言動によって、B は翻弄され、それが開示者に対するまなざしの芽生えの阻害要因になってしまったのではなかろうか。そのため、B は不全感を募らせていったのではないかと考える。とはいえ、その後の関係において、両者ともに以前よりも開示者と話せるようになったと感じており、開示者から話を聞いてくれたことに対する感謝の意を示されたことをうれしく思っているということが語られている。これは半澤ら(2008)も述べているとおり、どういったことを話したらいいのか戸惑っていても、的確なアドバイスを出来なかったとしても、自分自身の感情や体験と混同することなく、相手の立場に立って相手の気持ちを理解しようとすることで、十分相手の役に立てるのだということを、このとき A,B は実感していたのではないだろうか。

C においては、想起されたネガティブな自己開示場面が、開示者から問題解決のためのアドバイスを求められるような相談とともとれるものであった。この状況が A、B との違いであり、すなわち C は開示者から解決の糸口を求められ、援助者として頼られていたと考えられる。篠崎(1997)や原田(2003b)では、日常の相談場面において、一般の人々は、問題解決のための新たな視点や、とるべき行動を提案することをしばしば行っていること

が示唆されており、Cはその典型であったと考える。その際にCは指導的関与を得意としていることも、この開示状況の特徴と合っていたとも考える。

A,B,Cの三者に共通しているのは、自己開示時にどのような感情を抱いたにせよ、相手の心情や状況を対象者なりに了解しているという点である。Aは困惑しながらも、開示者の状況や心情を了解し、聞くという行動を選択している。Bもまた、どうしたら開示者が楽になるだろうかと考え、何も出来ないことにもどかしさを感じながらも、開示者を理解するために真剣に話を聞いていたことが伺える。Cにおいては、開示者に対する「こうしたら良いのになぜ出来ないのだろう」という疑問を持ちながらも、開示者の特徴を踏まえ、たうえでまずは聞くという行動をとり、その後解決のために開示者にアドバイスをするという行動をとっていたことが伺える。

さらに、被開示者と開示者の関係の変化に目を向けると、開示者から被開示者に何かしらのフィードバックがあった後に3人の対象者共に関係の変化を感じていた。A、Bの場合、被開示体験時に開示者からの感謝の意や信頼の証明ともとれる発言によるフィードバックを受け、開示者との関係が変化したと感じるに至っている。Cにおいては、被開示体験時ではないものの、長い時間をかけて開示者の変化という形でC自身のかかわりに対するフィードバックが与えられたことによって、開示者との関係を続けていこうと思うようになっていった。

また、A、B、Cの被開示体験において異なる点は、被開示者あるいは開示者が開示された内容に直接的に働きかけることが出来る範囲の違いにあるように思われる。A、Bが受けた開示は、A、Bにとっては耳を傾ける以外の働きかけは出来ない（対処の余地のない）ものであったのかもしれない。一方Cが受けた開示内容は、開示者自身にも何らかの対処の余地のあるものであり、開示者もそう思っているとCも感じたからこそ、Cは開示者のみならず、他の人物ともやりとりをし、解決策を見出そうとしていったと考えられる。

A、B、Cの語りから、被開示体験について「相談」という言葉が聞かれた。被開示者が相談であると捉えたということは、開示者から何かしらの援助を求められていると感じていたとも考えることが出来る。原田（2003a）は、相談という援助を求められる場面において、非専門家であっても相談を受けた者は相手の発言内容・立場や行為を肯定的に受け止め、自分なりに相手の気持ちを理解し、解釈し、問題解決のための新たな視点やとるべ

き行動を提案するという行動をとっているということを示している。A、B、C のとっていった行動は、開示者にとって原田（2003a）のいうところの援助者として機能していたと考えられる。さらに C においては実際に開示者に対してアドバイスを行うことで、友人関係に援助する側―援助される側という新たな役割が付加されていった可能性も考えられる。

第五章 総合考察

第 1 節 被開示者の感情、行動及び開示者との関係

第 2 章及び第 3 章においては、ネガティブな自己開示を受けた際の被開示者の感情や行動及びその後の関係の諸相を広汎に捉えるために、新たに関係尺度を作成し、さらに子の関係尺度も含め被開示者に関わる多くの要因を盛り込んだ探索的な質問紙調査を行った。その結果、対象者の多くは同性の友人からの自己開示について想起しており、その内容については家庭に関すること、恋愛関係をはじめとした人間関係全般や学業・進路に関すること、精神的・身体的な悩みなど多岐におよぶことが示された。また開示者の属性によって、開示された内容や時期に偏りが見られた。ネガティブな自己開示を受けた際に被開示者の抱きやすい感情は、開示者のために何かをしたいという思いであり、開示されたことそれ自体や内容に心を揺り動かされる衝撃であり、悲しみでもあった。その他にも種々の感情が認められた。被開示者の行動に関して、「言語反応の少なさ」、「気遣い」、「興味喪失」、「一体感」、「拒絶」、「意識散漫」、「遮断」、「解決探索」の 8 因子が抽出された。これらの行動はそれぞれの行動因子との間で相関も見られたことから、実際の場面においてはこうした行動が複合的になされる可能性が示唆された。さらに、被開示者の感情と行動の関連について検討した結果、被開示者が開示時に抱いた感情によっては生起する行動に差も見られた。自己開示後の被開示者と開示者との間の関係については、「よそよそしさ」「信頼に基づく率直さ」、「献身的親愛」、「気軽さ」、「意図しての聞き役」の 5 因子が抽出された。自己開示後に被開示者が開示者から感じる被受容感・被拒絶感について、「受容」「攻撃への不安」「無視」の 3 因子が得られた。これは近江ら（2004）で得られた結果とおおむね類似した結果が得られたと言える。また、その後の関係について、被受容感・拒絶感尺度との関連を検討したところ、被開示者と開示者の関係と、開示者について被開示者の感じる被受容感被拒絶感に関連があることが示され、被開示者と開示者の関係によって、被開示者が開示者から受容されている、拒絶されているという実感に違いが見られた。

第 4 章においては、第 3 章の質問紙調査に回答いただいた対象者のうちの 3 名に面接調査を行った。面接調査に当たっては、被開示者と開示者の関係をプロセスとしてとらえる

ために関係性ラインという新たな方法を提案し、導入した。また、第3章で得られた一般的傾向と面接対象者である3名の個別的特徴を比較した上で、面接に臨んだ。その結果、3名の対象者それぞれの共通点や個別的特徴を見出すことが出来た。A、Bの想起した自己開示場面はいわば、A、Bがどれだけ悩んだところで解決することの出来ない問題であったため、Aは開示されたことに戸惑いを感じ、何かをするべきなのか迷いながら、Bは開示者を楽に出来るような言葉をかけたいがかけられないもどかしさを感じながら、結果として開示者の話を聞くことに徹していたことが語られた。また、Aには特に顕著であったが、開示者の話を聞いているうちに感情に変化があったことが語られた。Aの関係性ラインにおいては、調査者の意図が伝わらなかったためか、起点が0でなく、直線で描かれているのが特徴的であった。起伏の明確なAの関係性ラインに、A自身の対人関係のありようが現れているようにも思われた。すなわち、Aの語りにあった、人の好き嫌いが激しく、相手から一方的に話されるというよりも自分自身も相手を信頼できると思わないと話を聞かないということとも繋がっているようにも思われた。Bは、開示者自身が居場所を得られたことに安心する反面、そのことで開示者とBが一緒にいられなくなることの間で揺れ動いていたことが語られている。Bの描いた起伏の多い関係性ラインに、B自身の迷いが現れているようにも思えた。一方、Cにおいては、開示を受けた内容が友人関係上の不和であり、Cはなんとかしたいと思い、奔走していたことが語られた。Cは、開示者のおかれた状況を把握した上で、その問題を解決するための示唆を与えようとしていたと考えられる。この行動は、原田（2003a）や原田（2003b）でも指摘されている一般の人が相談を受けた際の行動の典型的なものでもあるといえる。A、BとCの感情や行動及び関係の変遷の違いが何に起因するものなのか、面接対象者が3名と少ない本研究では明確に示すことは残念ながら難しかった。しかしながら、本研究では、そのいくつかの可能性を示すことが出来たと考えている。例えば、出会ってから開示されるまでの期間の長さ、あるいは開示を受けるまで二築いてきた信頼の程度、さらには開示を受けた時期の被開示者の発達段階が、被開示者の感情や行動及び関係の変遷に少なからぬ影響を与えているようである。また、個々人で想起しやすい・印象に残りやすいネガティブな自己開示もあるようだが、そうした開示を受けた内容に関わらず対処できる範囲の程度が狭い場合に、感情や行動の共通したパターンがAとBに認められたことも付記したい。さらに、対象者による特性差

という点に着目するならば、本研究にオープナー特性も加えた上で、被開示者の感情や行動及び開示後の関係を検討することによって、被開示者の特性に関連した開示者との関係の変化がより明らかになる可能性があると考ええる。

また、本研究においては、既存研究の多くがとる開示者に注目した自己開示研究という視点からではなく、一貫して被開示者に関心を向けての自己開示研究を進めてきた。そのような立場を取る本研究であったが、結果として自己開示が開示者・被開示者相互の役割交代を伴って進展し、この自己開示の返報性を背景として相互作用によって、両者の関係が変化していく可能性が示唆された。被開示者と開示者の関係の変化をとらえようとする際には今後返報性を背景として相互作用にも留意する必要があるかもしれない。

以上、本研究は、被開示者に関心を向けた自己開示研究であり、被開示者の感情や行動及び開示者の関係を捉えるための要因を含んだ質問紙調査からそれらの一般的傾向をある程度明らかに出来たと考える。また、そうした一般的傾向との比較及び関係性ラインを含む面接調査から、ネガティブな自己開示を受けた被開示者の感情や行動の実態、さらには関係の変化についてのより個々人に即した詳しいデータから個人の特性や状況の特殊性も踏まえた自己開示後の関係変化についてのいくつかの背景を提示できたと考える。

第2節 研究方法に関する今後の展望

本研究においては、対象者にネガティブな自己開示を受けた被開示者として、開示時の感情や行動、そしてその後の関係に至るまでを想起してもらった。感情については、対象者個人に即した表出を重視しての自由記述形式とし、回答を得た感情をカテゴリとして分類したのであるが、時間が経過しての想起された感情である点、実際場面での感情をどの程度反映するものなのかということには、注意する必要があるだろう。

また、自己開示後の被開示者と開示者の間の関係についてとらえるために、19項目からなる尺度を新たに作成し、使用した。その結果、抽出された一部の因子に関しては構成項目数が少なかったり、 α 係数が低いという問題もあった。今後、この19項目からなる関係尺度については新たな項目を追加することも視野に入れての再検討が必要であろう。

さらに、本研究では、被開示者と開示者の関係の変化をとらえるために、関係性ラインを立案し、導入した。本研究は、主に自己開示後の関係の変化をとらえることを目的とし

て関係性ラインを使用したため、関係性をラインを描きそれについて語ることにについての検討は加えなかった。しかし、関係性ラインを描き、開示者との間にあった出来事を回顧しそれを新たにストーリーとして語ることは、エンカウンターグループにおけるライフラインについての研究を行った明石(2010)が示すように、開示者とのつながりが意識され、それを語ることを通してこれまでの開示者との関係が新たな物語として書き換えられ、これまでの開示者との関係を肯定的なものと感じられる契機となると考える。関係性ラインを描き、それについて語ることの効果について詳細な研究が積み重ねられることによって、自己開示研究にとどまらず、心理臨床活動においても、関係性ラインの効果が期待できるのではなかろうか。しかしながら、本研究で発案した関係性ラインの用い方には改善が望まれる点もいくつかあり、以下にその一例を示し、本研究を閉じることにしたい。本研究では、対象者が関係の変化を考えやすいようにするため、原点や関係の深さを示す縦軸、時間の経過を示す横軸といった基準を設定したが、そのことがかえって対象者の自由度を狭め、対象者を窮屈にさせてしまった可能性もある。今後こうしたは実施方法も含めて、関係性ラインの効果について検討していくことが望まれる。

文献

- 明石綾香 2009 対話型ライフラインがもたらすもの—分類枠組み作成の試み— 弘前大学大学院心理臨床相談室紀要 6, 1-10
- 明石綾香・豊嶋秋彦 2010 対話型ライフライン効果の検証と際探索 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要 7, 1-8
- Altman, I., & Taylor, D.A. 1973 *Social penetration*. New York ; Holt, Rinehart & Winston.
- Carkhuff, R. R. 1987 國分康孝（監修）ヘルピングの心理学 講談社
- 大坊郁夫 1984 対人関係における自己開示性とエゴグラム特徴 交流分析研究 8, 19-31
- Chelune, G. J. 1976 The Self-disclosure situations survey : A new approach to measuring self-disclosure. *JSAS Catalog of selected Documents in Psychology*, 6, 111-112
- Egan, G. 1986 鳴澤實・飯田栄（訳） 熟練カウンセラーを目指すカウンセリング・テキスト 創元社
- 遠藤公久 1989 開示状況における開示意向と開示規範からのズレとについて—性格特徴との関連— 教育心理学研究, 37, 20-28
- 榎本博明 1987 青年期における自己開示性とその性差について 心理学研究 58, 91-97
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 榎本博明・林・塩崎 1984 青年期の対人関係（I） 日本教育心理学会総会発表論文集 130-131
- 八田純子 2009 大学生が抱える日常のトラブルと他者への開示について 愛知学院大学心身科学部紀要 5, 41-47
- 原田杏子 2003a 援助（Helping）のための面接技術—幅広い相談領域に応用できる技術とは— 東京大学大学院教育学研究科紀要 43, 175-183
- 原田杏子 2003b 人はどのように他者の悩みを聞くのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成— 教育心理学研究 51, 54-64

- 半澤歩・渡辺玲二郎 2008 日常的な相談場面における「共感されること」の効果 茨城大学教育学部紀要（教育科学） **57**, 207-219
- Jourard, S. M. 1971 Self-disclosure :An experimental analysis of the transparent self. *New York* ; Wiley-Interscience.
- Jourard, S.M, &. Lasakow,P 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social psychology*,**56**, 91-98
- J.S. ザロ・R.バラック・D.J. ネーデルマン・I.S. ドレイブラッド共著 森野礼一・倉光修 共訳 1987 心理療法入門 誠信書房
- 河村茂雄 2000 心のライフライン—気づかなかった自分を発見する— 誠信書房
- 川西千弘 2008 被開示者の受容・拒絶が開示者に与える心理的影響：開示者・被開示者の親密性と開示者の自尊心を踏まえて 社会心理学研究 **23**, 221-232
- 川喜多二郎 牧島信一 1970 問題解決学 KJ 法ワークブック 講談社
- 牧野由美子・古川知子・木原水帆・糸賀万智子 2002 自己開示における被開示者の存在が不安と孤独感に及ぼす効果 家族問題相談研究（聖徳大学家族問題相談研究センター紀要） **1**, 15 - 20
- 松浦均 1992 援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響 名古屋大学教育学部紀要，教育心理学科 **39**, 23 - 32
- Miller, L.C., Berg, J.H., & Arvher, R.L. 1983 Opener: Individuals who elicit intimate self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 1234-1244
- 蓑崎浩史・佐々木和義 2006 自己開示が被開示者に及ぼす影響 発達心理臨床研究（兵庫教育大学紀要） **12**, 43 - 51
- 宮崎貴子 2005 自己開示研究における被開示者の機能 立教大学文学部紀要, **47** , 31-41
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦 2002 大学生における自己開示方法及び被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究 **11**, 12-23
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦 2004 自己開示が被開示者の肯定的・否定的反応に及ぼす影響—被開示者の特性ごとに見た自己開示による反応の違い— 健康心理学研究 **17**, 70 - 78
- 西田貢 2000 友人の悩みの相談に対する児童の応答の分析 カウンセリング研究 **33**,

- 中村陽吉 1983 自己開示尺度 対人場面の心理 東京大学出版会 Pp 235-238
- 小口隆司 1989 自己開示の受け手に関する研究—オープナー・スケール, R-JSDQ と SMI を用いて— 応用社会学研究 (立教大学社会学部紀要), **31**, 82-91
- Omarzu, J. 2000 A disclosure decision model : Determining how and when individuals will self-disclose. *Personality and Social Psychology Review*, **4**, 174-185
- 近江則子・田名場忍 2004 大学生の被受容感と被拒絶感に影響を与える他者要因の検討 弘前大学教育学部心理臨床相談室紀要 **1**, 9-14
- Pennebaker, J.W. 1986 Confronting atraumatic event: Toward an understanding of inhibition and disease. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 274-281
- Riley, G.D., Cozby, P. C., White, G.D., & Kjos, G.L. 1983 Effect of therapist expectations and need for approval on self-disclosure. *Journal of Clinical Psychology*, **39**, 221-226
- 篠崎信之 1997 日常相談状況における非専門家の行動—「素人カウンセラー」概念の提唱とその行動構造の検討— 武蔵野音楽大学研究紀要 **28**, 59-65
- 高橋真代・佐藤健二 2008 自己開示を引き出しやすい聞き手の非言語的特徴の検討 徳島大学総合科学部人間科学研究 **16**, 83-92
- 豊嶋秋彦・長谷川恵子・加川真弓 2002 非専門家学生における適応支援者としての社会化過程—不適応生徒の長期支援学生に対する PAC 分析— 弘前大学保健管理研究 **20**, (2) 15-35
- 豊嶋秋彦・近江則子・斉藤千夏 2004 教員養成学と不登校生サポーターの対人専門職への職業的社会的化—方法論の検討と PAC 分析を通して— 弘前大学教育学部紀要教員養成学特集号 **65-88**
- 浦光博 1999 ソーシャルサポート **541** 中島義明・安藤清志・子安増生・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣

面 接 承 諾 書

1. 面接者氏名 泉谷 京（弘前大学大学院教育学研究科）
2. 調査名 「身近な人との会話に関する調査」
3. 連絡先
4. 指導教員 田名場 忍（弘前大学教育学部）

以下の確認事項をお読みください。

- (1) お話ししたくないとお感じになった場合は、途中でも面接を中止することが可能です。
- (2) お話ししづらいことを無理にお話ししていただく必要はありません。お話しできる範囲のことをお話してください。
- (3) お話しいただいたことやお書きいただいたことに関して、最大限の注意を払い、個人が特定されないよう配慮いたしました上で、論文や研究発表などで公表させていただきます。
- (4) 公表する際には、事前に公表資料に目を通していただき、ご確認いただいた上で、公表についてご判断いただければと存じます。
- (5) 録音させていただいた音声データや筆記記録は厳重に保管し、研究以外の目的では使うことは決していたしません。

上記について、ご承諾いただけましたら、以下にお名前と日付をご記入ください。

氏名： _____

日付： _____ 年 月 日

身近な人との会話に関する調査

身近な人との会話の中で、皆さんが何を感じ、どのように行動されているのかについてお伺いします。お答えいただいた内容は研究の目的でのみ使用いたしますので、安心してお答えください。何卒ご協力のほどよろしくお願いします。

（研究者）弘前大学大学院教育学研究科臨床心理学分野 1 年 泉谷 京
（研究指導者） 弘前大学教育学部附属教育実践総合センター 田名場 忍

はじめに、あなたの性別と年齢をお答えください。

性別 男 ・ 女
年齢 () 歳

身近な人から、その人の苦しかったことや辛かったこと、悲しかったことを打ち明けられた経験がありますか？その中でも、あなたにとって最も印象深かった経験について、ゆっくりと心を落ち着かせて思い返してみてください。誰から、どんなお話を打ち明けられた時だったのでしょうか。

以下の質問はその経験についてお伺いするものです。

1. どなたから打ち明けられましたか。該当する人物に○をつけてください。

母親 父親 兄 弟 姉 妹 同性の友人 異性の友人 恋人
先輩 後輩 その他 ()

※では、その方を Aさん として、以下の質問にお答えください。

2. 打ち明けられたのは、あなたがいつ頃のことでしたか。該当するところに○をつけてください。

小学校 低学年 ・ 中学年 ・ 高学年 中学校 1 年 ・ 2 年 ・ 3 年
高校 1 年 ・ 2 年 ・ 3 年 大学 1 年 ・ 2 年 ・ 3 年 ・ 4 年
その他 ()

3. 打ち明けられたお話はどのような内容でしたか。差し支えない範囲でお答えください。

4. そのお話を打ち明けられたとき、あなたはどのような気持ちになりましたか。

[]

5. Aさんがあなたに打ち明けようと思ったのはなぜだと思いますか。

[]

6. Aさんからそのお話を打ち明けられた時、あなたはどのような行動をとりましたか。
1～5の中で、あなたに最も近いと思う数字一つに○をつけてください。

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1) Aさんの気が休まるまで一緒にいた-----	1	2	3	4	5
2) 集中して話をきけなかった-----	1	2	3	4	5
3) 好意的に反応した-----	1	2	3	4	5
4) 真剣だった-----	1	2	3	4	5
5) 関係のない話を始めた-----	1	2	3	4	5
6) 他人事のように感じた-----	1	2	3	4	5
7) 頷くだけだった-----	1	2	3	4	5
8) 結論が出るまできいた-----	1	2	3	4	5
9) つきはなした-----	1	2	3	4	5
10) 話題をそらした-----	1	2	3	4	5
11) 最後まで時間をかけてきいた-----	1	2	3	4	5
12) Aさんが楽になるように心がけた-----	1	2	3	4	5
13) 時間の経過が気になった-----	1	2	3	4	5
14) Aさんの話に興味を感じられなかった-----	1	2	3	4	5
15) 意見を言わなかった-----	1	2	3	4	5
16) 何も質問をしなかった-----	1	2	3	4	5

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
17) 自分の体験を話した-----	1	2	3	4	5
18) 自分のことのように感じられた-----	1	2	3	4	5
19) Aさんのことを考えるのが面倒になった-----	1	2	3	4	5
20) 解決の行動まで一緒にとった-----	1	2	3	4	5
21) 話の途中でさえぎった-----	1	2	3	4	5

7. そのお話を打ち明けられたあと、Aさんとあなたとの関係はどうなりましたか。1～5の中で、最も近いと思う数字一つに○をつけてください。

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1) Aさんへの親しみが増した-----	1	2	3	4	5
2) Aさんは私をよく批判するようになった-----	1	2	3	4	5
3) Aさんと一緒にいると 落ち着かない感じがするようになった-----	1	2	3	4	5
4) Aさんと一緒にいる時、 聞き役になることが多くなった-----	1	2	3	4	5
5) Aさんの話をもっと きいてあげたいと思うようになった-----	1	2	3	4	5
6) Aさんは私を理解していると感じるようになった-----	1	2	3	4	5
7) Aさんと一緒にいることに不安を覚えた-----	1	2	3	4	5
8) これから困ったことが起きたら Aさんに話そうと思った-----	1	2	3	4	5
9) 私はAさんから背を向けられていると 感じるようになった-----	1	2	3	4	5
10) 私はAさんに守られていると 感じるようになった-----	1	2	3	4	5
11) Aさんを苦手だと感じるようになった-----	1	2	3	4	5
12) Aさんをいっそう大切に感じるようになった-----	1	2	3	4	5
13) Aさんは私につらくあたることが多くなった-----	1	2	3	4	5
14) 私が少しでも失敗したら、 Aさんは私を見捨てるだろうと感じるようになった-----	1	2	3	4	5

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
15) Aさんに接するとき、これまでよりも 自分に正直でいられるようになった-----	1	2	3	4	5
16) Aさんへの信頼が増した-----	1	2	3	4	5
17) Aさんは私を大切にしていると感じるようになった-----	1	2	3	4	5
18) 私はAさんと一緒にいると 心地よいと感じるようになった-----	1	2	3	4	5
19) Aさんとはかかわりすぎないようにした-----	1	2	3	4	5
20) Aさんと一緒にいると 無力感がつのるようになった-----	1	2	3	4	5
21) 会話、メールなどAさんと 接触する回数が増えた-----	1	2	3	4	5
22) Aさんの前では自分らしくふるまえなくなった-----	1	2	3	4	5
23) Aさんと気軽に話せるようになった-----	1	2	3	4	5
24) Aさんとはあえてこれまでどおりに 接するようにと考えるようになった-----	1	2	3	4	5
25) Aさんとは顔を合わせづらくなった-----	1	2	3	4	5
26) 前よりもAさんのために 何かしてあげたいと思うようになった-----	1	2	3	4	5
27) Aさんは私を受け容れて くれていると感じるようになった-----	1	2	3	4	5
28) Aさんに気をつかわなくなった-----	1	2	3	4	5
29) 私はAさんからないがしろにされていると 感じるようになった-----	1	2	3	4	5

アンケートはこれで終了です。
ご協力まことにありがとうございました。

今回お答えいただいた内容について、私（研究者）と直接個別にお会いして詳しくお話をして
いただけましたら幸いです。ご協力いただけます方は、以下にお名前と、メールアドレスある
いは電話番号等ご希望のご連絡先をお書きくださいますようお願いいたします。なお、日程等につ
きましてはご相談の上調整させていただきます。お忙しい折とは存じますが、何卒ご協力のほ
どよろしくお願いいたします。

名前 ()
メールアドレス ()
または電話番号 ()